

「巻き込まれ親父の海賊」

作 藤次郎政秀

●プロローグ、H G

白山亭オーナー兼碇屋社長H Gには、皇国政府軍に在籍していた徴兵時代の軍歴について、謎が多い。軍事機密に触れる事が多く、また軍歴に記載出来ない経歴が存在する。かつて弟子のI YがH Gの白山亭と碇屋に所属した（正確にはI Yが押しかけ弟子入り）時に、実の親であるB侯爵が第一秘書のT Kに命じて、H Gの経歴を調べさせたことがあるが、皇国政府軍徴兵期間の軍歴については、H G自体が帝都機甲師団特殊車両試験部隊に所属していて、軍事機密に値する兵器類を扱っていたり、戦場での行動履歴や戦果とか実験データ等多くが、軍事機密として一般に公開されておらず、貴族のB侯爵の名を使っても入手する事が難しく、B侯爵から皇国国家公安局のI Sを通じて、軍令部と参謀本部からは、必要最低限しか、H Gに関する情報が提供されなかった。

B侯爵ですら、このような苦勞をしたので、民兵会社D Kの日和見保身内密主義の上層部（サイコパスの精神異常者達）が、当時の軍令部からH Gに対する軍歴を入手しようとしても、軍事機密の壁に幾重にも阻まれ、結果、H Gを得体の知れない人物として疎んじていた。

●剣士I I

白山亭夜のP u b営業時間中…

「えー、I Iさんって、大昔の剣豪の末裔なんですか？」

と、女給姿のT Yが驚いた。皇国では、夏至を挟んだ一週間の先祖を敬う祭りが行われるので、祭り期間中の行事や、旅行や故郷に帰る人が多く、帝都のオフィス街は閑散とする。白山亭は、Y国際港を使うそれらの客層を見込んで、営業を行う。但し、アルバイト達も、この期間は公私共に忙しくて（白山亭のアルバイトの多数は、警察官）、アルバイトのシフト

が組めず、おかげでT Tは、アルバイトのシフトのやりくりに毎年頭を悩ませている。なのでH Gの弟子達を使って営業をするのであるが、この日は閑散としていた。

「そうだよ、I Iの名は、その昔、皇国でその名を轟かせたご先祖の剣豪にあやかって、両親がつけたんだそうだよ…だからI Iと木刀で剣術の試合をすると、俺でもなかなか勝てないんだ」

と、H Gがグラスを傾けながら言った。

「そうですね…社長は木刀で撃ち込めないと判ると、私の小手を狙って蹴りを入れてきて、怯んだ隙に足払いをして、私に締め技を掛けてきますからね…剣術の試合では無くなりますね(怒)」

と、苦言を言うI IにH Gは苦笑いをした。

「わたし、立ち会ってみたいです」

と、T Yが言うと、I Iは困った表情をして、

「…最近、練習していないのでどうかなあ…ハハ。でも、やりましょうか？」

と、やる気になった。

「ハイ、お願いします」

港町警察署道場…

白山亭の定休日、H G達は道場に居た。そこに、I Iの妻I Jが来ていて、T Tは相変わらず見学に来ていた。それから、海上警備庁のW Yが来た。H GがI Jに対して、

「I Jさんは？」

「はい、主人が剣術の試合をすると言うので、助太刀に来ました」

『助太刀』とは？」

「わたしも、C県領地に居た海賊の末裔ですので、長巻で立ち会ってみようかと」

「そうですか」

「H Gオーナー、面白そうなので、私も試合させてください」

とW Yがワクワクしながら言った。

「いいですよ」

今回は、剣術用の防具を着けた試合形式となり、T Y達も手加減せずに真剣に試合ができる様にして、総当たり戦にして順番をくじ引きで決めた。

それには、当然H Gも参戦した。それに際し、I Iから

「社長！異種格闘技じゃないので、くれぐれも、足技を出さないでください！」
と釘を刺された。

第一試合。T Y v s I J。棒のT Yと長巻のI J…

試合は、五分五分…最初から決着つかない展開になった。最後はI Jの脛を狙った一撃をT Yが飛び上がって、交わし、I Jの頭上に棒を打ち込むことで決着がついた。

「…いやー、I Jさん強いわ」

と言う、T Yに対して、I Jは

「いえいえ、若い子にはかなわないわ」

第二試合、W Y v s H G。棒のW Yと木刀のH G…

試合は、以前の防具ナシで試合した時のリベンジ（巻き込まれ親父の海難」参照）…防具を付けている事で、二人供真剣になるが、やはり、H GがW Yの隙について胴を決めて決着。

「参りました。H Gオーナー。やはり敵いません」

「ハハ、こちらも苦戦しました」

第三試合、T Y v s I I。棒のT Yと木刀のI I…

元々、T Yの希望であつたが、I Iが優勢に試合を進め、最後はI IにT Yが棒を叩き落とされ、その隙にI Iに面を決められ、決着。

「准尉と違って、まったく隙が無いです。ありがとうございます」

「…はは、まだまだ私もやれますかな」

とI Iは謙遜した。

第四試合、H G v s I J。木刀のH Gと長巻のI J…

試合は、H Gが間合いを詰めて、I Jの面を決めて決着。

「お見事です。H G社長」

「いや、I Jさんもなかなか…」

第五試合、W Y v s T Y。お互い棒…

試合は、T Yが健闘するも、やはりW Yが勝った。

「また、負けました。W Yさん。敵わないや」

「また、やりましょう。T Yさん」

第六試合、H G v s I I。お互い木刀…

試合は、最初からI Iが優勢に進め、H Gは面を取られ、I Iの勝利。

「やはり、勝てんな」

「社長が足技を使えないので、落ち着いてできました」

「何だと！」

「ハハ」

第七試合、W Y v s I J。棒のW Yと長巻のI J…

試合は、五分五分…なかなか決着つかない展開になった。最後はI Jの脛を狙った一撃に

W Yが決められる波乱があつた。

「あちやく、負けちゃった！」

「でも、T Yさんと違い、なかなか隙が見つけれませんでしたよ」

「ありがとうございます」

第八試合、H G v s T Y。木刀のH Gと棒のT Y…

試合は、いつもの通りにH Gの勝ち。

第九試合、W Y v s I I。棒のW Yと木刀（二刀）のI I…

I Iが二刀を使うのは非常に珍しい…。試合はI Iの圧勝。

「凄い！全く隙がありませんでした。それに、私二刀流と試合したの初めてです」

「ハハ」

第十試合、I I v s I J。木刀（二刀）のI Iと長巻のI J…

やはり、二刀のI Iの圧勝。

「ま、二刀を持ったあなたには勝てないわね…一刀でもなかなか勝てないのに…」

「エエッ！ご夫婦で勝負した事あるんですか？」

「嫁入り前に、試合で負けて惚れたのよ」

「『意外な事実！』」

「それ以降も、何度か立ち会ってるけど、なかなか勝てないわ」

「『…(汗) (夫婦喧嘩も、剣と長巻なのかなあ…)』」

道場で、振り返りをする。その時にHGが

「IIの二刀流は久々に見たが、凄まじいな」

「ハハ…体力が持たなくなったので、短期決戦に持ち込もうと…」

と、IIが言うと、

「准尉と試合した時、二刀流じゃなかったですね？余裕ですか？」

と、TYが訊ねると、

「いや…本当は二刀を使おうかと思ったけど、昔、二刀で社長と試合した時に、社長が、私の一刀を社長の渾身の一撃で叩き落され、同時にもう一刀を足で蹴り払われた事があったのでね…だから、今回は一刀を両手でしっかり握ったのですよ」

と、IIが言うと、TYは

「…そう言えば、今までわたしと棒でやり合っても、准尉は足を出してこなかった…それって、准尉にはまだ余裕があるってこと？」

「ですね」

と、IIが澄まして言った。

● 見合い

前述の期間から、皇国の人々の多くが、旅行や帰省から帰って来た後に、白山亭は夏休みを取る。当然、実家に帰省する者もいれば、旅行に行く者、母屋で相変わらず過ごす者に別れる。先年、HGは白山亭ならびに付属建屋の改築費用等の借金を返したので、心ばかりの

夏季特別手当を弟子達にも渡した。中身は前述の期間前に官公庁ならびに企業から配られる夏季特別手当（こちらの世界の賞与の様な物）には、とても及ばないが…（汗）

「あ、姐さんお帰りなさい」

母屋の食堂で、I Aが出迎えた。

「ただいま」

「なんか、疲れている様だけど、実家でなにかあったの？」

食堂でI Aと盤ゲームに興じていたH Yが、T Yを気に掛けた。

「いや…これで」

と言つて、T Yはテーブルの上に大きな封筒を置いた。

「中身は？」

「…お見合い写真…」

とボソリと言うT YにI Aは驚き、

「え〜！」

「見ていいの？」

と、興味津々と言うH Yに、T Yは（どうせダメと言つても、強引に見るだろうけど…）と思ひ、

「どうぞ、H Y姉さん」

H Yが封筒を開けて、中の写真を見ると、

「あら、そこそこいい男ね」

「…姉さん、そこそこって…（汗）」

「誰？」

「W Yさんの弟…」

「「え〜、マジっ？」」

「父さんがどうかと…」

「WYさんって、親父が言ってたけど、豪族の末裔でしょ？」

「そう…家同士は武人・軍人会で旧知の中だし、彼も子供の頃から知ってるしね…」

「で、どうなの？」

「父さんは、『こんな話、二度とないぞ！是非受けなさい』って…」

「それより、あなたはどっと思ってるの？TY」

「…どおって…」

「これからの人生よ…WYさんの弟との相性とか、WYさんのご実家の事とか、それから、まだ碓屋エージェントを続けるのか、結婚してエージェントを引退する事も含めてね」

と言うHYにTYは狼狽えて、

「…そこまでは、まだ…」

と言うと、HYは

「ま、まだ想像できないわよね。でも、ここがある意味ターニングポイントかもね」とあつさり言うと、TYは不満げに

「そんな、HY姉さんはどうなんですか？まだエージェントを続ける気ですか？」

と訊ねた。HYは澄ました顔で、

「わたしは、この先艱が持たなくなっていくから、引退するのも近いと思っているけど、それまで親父がわたしの事を必要としてくれる限りは、傍にいたつもりよ」

「HY姉さんは、そこまで考えているんですね…じゃ親父に必要とされなくなったら？」

「わたしは、お店でコーヒー淹れられるから、そのままお店でコーヒー淹れるわよ…それと同時に碓屋の次世代を親父と育てるわ」

と、あつさり言うと、TYとIAは驚いて、

「…そこまで、考えてるんだ！」

「そりよ。この歳でエージェントになったからは、活躍できる期間は短いからね…もつとも、親父が妻に迎えてくれれば一番なんだけど…」

と言つて、H Yは両手を頬に当てて真っ赤になった。

「…姉さん、最後のオチが無ければ、カッコよかったのに…」

と、I Aがボソリと言うと、H Yは途端に

「何ですって！『オチ』とは何よ！！」

「エッ？本気なんですか？」

とI Aは驚き、身をすくめた。

「当たり前でしょ！で、どうする気？」

と、T Yに話を振ると、T Yは

「少し考える時間が欲しいと言つて、家を出てきました。わたしも、あと十年若ければ… I Aの歳位なら、あと十数年と区切つて考える事が出来たかもしれないです」

「…姐さん」

「I A、あんたも後十年位したら、この様になるかもよ」

とH Yが言うと、I Aが悲しそうな顔で、

「そんな…」

「…そう言えば、一番この手の話に食いつきそうなI Yが居ないわね」と周囲を見渡しながら、H Yが言うと、I Aが

「I Mさんに呼び出し食らつて、帝都にショッピングに行きました」

と言う、I AにH YとT Yは驚き、

「「…そうなの？」」

●その頃のI YとI M

帝都のショッピング街…

「I Y、次行くよ」

「I M…今度はどこに行くのですか？」

「まだまだあるわよ！」

「エーッ、こんなに買って…何着買うつもりですか？」

「全部、あんたのよ！C E伝にT Yさんから聞いたけど、あなたこの前、M JさんとV Tさんに、あのロングTシャツ着せたんだって？（「巻き込まれ親父の隻眼」参照）」

「はあ…」

「あれ、あんたの寝巻に買ってあげた奴じゃない！M Jさん、あれ着て事務所帰ったんだって？」

「はい、彼女の服かなり汚れていて…、風呂場で服ごと洗ったので…仕方なく」

「あの二人、外国人だからロングTシャツに書かれている文字の意味知らないだろうけど

…あれをチョイスした、あたしの身になってよ」

「M Jさんは、同じY 国際港に事務所があるから、近所でしたし、V Tさんは帝都のホテルに帰るには、あれでは恥ずかしいと言ったのと、任務でゴシックローリータ服来ていたので、私のを貸しました」

I Yの言葉に、I MはI Aとの話を思い出し、

「V Tさんは…そうでしょうけど(苦笑)…M Jさんは近所でも恥ずかしいのよ…あんた、M Jさんと同じように、あの商店街をあの格好で歩く気？H G社長はどう思うでしょうね！母屋であれ着てH G社長に見られた時、どんな反応したの？」

「親父は、何とも言いませんでした…ただ（下着が見えた時に）『セクシーだぞ』と言いましたが…」

と、平然と答えると、I Mは怒って、

「あんたねえ！HG社長は、あんたのこと、娘程度にしか見ていないからよ。ったく、HG社長の弟子だか何だか知らないけど、小遣い程度しかお金貰ってないんでしょ！」

と言うと、IYは憤慨して、

「私は、親父に身も心も捧げています！娘…と言われると、身も蓋もありませんが…いえ、心外です。それに、小遣いもタダでもいいと思ってます」

と言いつ返した。IYの言葉にIMもヒートアップして、

「それが、駄目なの！もつとオシヤレしてよ。若いんだから…このままじゃ、あんたKJ君とデートする時にも、碇屋の制服着て行きそうなもの」

IYは（なんでアイツ（KJ）とデートしないといけないの？）と思いつつ、

「それで、いいのでは？」

と、平然と言うと、IMは呆れて、

「ダメでしょ、あんたの事だから、制服のジャケットの下に拳銃隠し持って行きそうなもの」

「エッ？ダメなんですか？あいつなら、私に何かした時に返り討ちにするために…」

とIYが真顔で言う、IMは怒って、

「ダメに決まってるでしょ！ったく…ゴシッククロリータ服はいい物持ってたんだから、普段着る物もいい物着なさいよ」

「あの服は、実家に居た時代に買ったもので…」

とIYは俯いて言った。IMは呆れて、

「あゝ、そうなの…実家ではチャホヤされたんでしょうね。お姫様だものね」

と、からかう様に言うと、それが判らないIYは

『チャホヤ』って、そんなんじゃないやありません！」

と真顔で否定した。IMは、

「…判ってるわよ。あんたが実家では肩身の狭い思いしていたのは…その反動でゴシック

ロリータ趣味に走ったんでしょ、大方」

「ウツ…それを言われると…」

「妹さんは、ゴシックロリータ服着ると、可愛くてあたしでもお持ち帰りしたくなるけど、あんたももうじき三十路よ」

「…お互い様です」

「あん？何か言った？」

「…別に」

「あつ、ランジェリーも買わないと…セクシーなものも数点買わないと…あと勝負下着も…」

「そんなのいりません！（汗）」

「ダメよ、あたしが買ってあげるんだから、スポンサーの意向を尊重しなさい」

「そんな」

● I Yメイクアップ

母屋玄関…

I Yが先日 I Mに買って貰った服を着て出かけようとすると、店の休憩で母屋に入ってきた T Tと遭遇した。

「あら～ I Y綺麗な服着て、さては K J君とデート？」

「違います！」

「そんなむきになって否定しなくても…」

「違いますっつたら、違います」

「そ…なの？」

「そうです」

「ま、そこまでにしときましょ…でも、折角そう言う服着たんだから、化粧くらいしたらど

うなの？」

「…そうなんですか？」

「I Y、あなたキチンと化粧した事ないの？」

と、T Tが驚くも、I Yは

「はあ…」

と生返事をした。

「ちよつと、時間いい？お姉さんがメイクしてあげる」

と言って、I Yを玄関から中に引き戻した。

「ナニナニ、I Yメイクした事無いんだって？」

K Mが客間の襖を開けて、廊下に出した。

「そうみたいです」

「じゃ、こつち来て、オネーさんも手伝ってあげる…」

と、I YはT Tと、K Mが經理の執務室にしている客間に引っ張り込まれた。

「T T、メイクは任せるわね。化粧品は、そのボックスにあるから…簡単なモノしかないけど」

「はい、これで十分です」

「あたしは、髪を…まずは、この尻尾から…」

と言って、K MはI Yの髪を纏めだした。

…I Yは腰まで届くロングヘアですが、いつも後ろで束ねているだけで、H Gはそれを
尻尾”と呼んでいます。作者

「I Y、もうじき三十路なんだから、ちゃんと化粧しないと」

とK Mが言うが、I Yは反応薄く、

「はあ…」

と、返事をした。

「でも、この歳になるまで、ロクに化粧しなくても、綺麗なんだから、羨ましいな…化粧したらもつと映えるわよ」

と、TTも言うが、IYは認識が足りずに

「そうでしょうか？」

と、返事をした。

「そういや、あんた達エージェントって、あまり化粧しないわね」

とKMが言うが、IYは実感がなく、

「そうですか？」

と言うと、KMはTTに、

「チョット、TT。あんたこの娘達のお姉さんだから、そういう事を見てあげないと…メンタル面はちゃんとフォローしているけど、外見とかもフォローしてあげてよ」

「…スミマセン」

とTTは恐縮してKMに謝った。それを聞いて、KMは、

「で、IY達自身は、娘内でこう言った話をしないの？」

と、IYに話を振ると、

「“こう言った話”とは？」

「ファッションとか、メイクの話よ。しないの？」

「しませんねえ…」

「ほら、だからTT。あんたがしっかりしないと！」

「スミマセン(汗)」

IYのメイクに集中したいところであるが、小姑KMの説教がTTにまで及び、それが正論なので、TTは恐縮するしかなかった。

「I Y…でも、簡単な基礎化粧品くらいの知識はあるみたいね…誰に教わったの？」

「実家の侍女からです」

「てっ、事は学生時代に得た知識のままなの？」

「はい…」

I Yの生い立ちを知っている二人は、馬鹿にするのではなく、可哀そうと思った。

「ったく、これだから父子家庭は…」

と、K Mが言うと、T Tは苦笑した。

…K Mが「父子家庭」と言ったのは、比喻です。それだけ、H Gと弟子達の親密さを物語っています。作者

「じゃそれ以降、メイクとか教わる事はなかったんだ」

「…ハイ」

「同室のH Yから、何も言われなかったの？」

と、T Tが訊ねると、

「いえ…」

「H Yはダメよ。あの娘特殊メイクだから…」

「と、〃特殊メイクって〃…K Mさん(笑)」

T Tは、K Mの毒舌発言がツボにはまってしまった。

「だって、あの歳(H Yはもうじき五十歳です)で、童顔なんて、絶対特殊メイクよ！部屋じゃなくて、お店のレストルームとかで密かにメイクしてるのよ！絶対」

「…やめてください！ツボにはまって手元が狂っちゃうわ(笑)」

T TにメイクされているI Yも、笑いを必死に堪えていた。(H Y姉さん、この事、聞いたら、絶対に怒るわね…でも、相手が親父も敵わないこの館最強のK Mさんだから、ぐうの音も出ないでしょうけど…(苦笑))

「TYとMPは野生児だし(笑)…メイクもあまりしないわね。X姉妹はまだ若くてピチピチだから、メイクする必要もないし…あ、IAはちゃんとしてるわね…あの娘、お店と普段のメイクをキチンと分けてるし…」

「TY先輩とMPは“野生児”ですか(笑)…IAはそう言えば…風呂上がりのスツピンの顔は、なんかのつぺりした感じがしますが…」

KMの言葉にIYが言うと、

「確かにそうですね。あと外回りの営業の時もメイク変えてますしね」

とTTが同意すると、IYは(…だから、親父が言うには、IAは“小狸”なんだ(笑)と妙な納得をした。

「IY…あんたも、HGに“子狐”と言われてんだから、チャンとメイクして化けないと」

とKMが言うと、IYは驚き、

「エッ？親父が私の事を“子狐”って思っているのを知っているんですか？(「巻き込まれ

親父の憂鬱」参照)

と聞き返した。それを聞いて、KMは平然と、

「よく、ここで話をしている時に言ってるわよ」

「なんですと？」

「アレ？あたしとHG…あと、SKやTTとII交えて、あんた達エージェントの娘達の事話している時、しばしば出てくるけど…あら、言っちゃいけなかった？TT…」

「あら、私も准尉が普段からそう、この娘達をそう呼んでいるので、てつきり…」

それを聞いて、IYは驚くと共に(このく親父め！…でも、TTさんが“犬”と親父に思われているのを知っているのかな？そう言えば、親父がX姉妹を“子鼠共”と言っているのもその流れかな？)と思った。

KMはIYの髪を纏めながら、ふと

「H Gと言えば、あいつが幼い頃、叔母さんが長い入院をする事になった時ね、あいつの兄貴と一緒に当時近所に住んでたあたしの家で預かる事になってね…」

「准尉はここに預けられたのではないのですか？」

とI Yが訊ねると、K Mは頷いて、

「…結果的にはね。なにせ、あのヤロ、家に来てすぐにギャン泣きしやがって…『お家に帰る』ってね、歩いても十分そこの近所なのによ…仕方なく、叔父さんは、あいつをここに…当時のお婆さん夫婦…あの時は娘の叔母さんは、兵役で家を出ていたらしいから…そこに預ける事にしたら、ここでは何事も無かったかのように過ごしやがって…(怒)」

と、K Mが言うと、T Tは「あら、准尉にも可愛い時分があつたのですね」と言つて笑い、I Yは素直に驚くとともに、何気に隣のH Gの部屋の方を見ると、H Gの祖母の霊が苦笑していた。

「それでね、ウチの父はH Gの兄弟の内とどちらかを養子…あたしの婿養子に迎えようとしてたんだって…」

と、K Mが言うと、I YとT Tは驚き、

「何ですと?」「ええっ!」

「でもね、弟が生まれたので、話は無くなったわ…そして、あたし徴兵時代に子宮頸がんと診断され、子宮摘出手術受けて、産まず女になったから結婚を諦めて今の歳まで来ちゃったけど…父が死ぬ間際、あたしに『こうなるんだったら、徴兵前にHの所から、どっちか強引に婿養子にすればよかった』…なんて、言いやがって!(怒)」

「[…」

「ま、あたしはH Gが実の弟より、弟と思つてゐるから、ここでH Gがあたしの力を必要としなくなるまで、仕事をするんだ…だから、最近Kお嬢様が休憩時間中にあたしの所に来て、色々聞いてくるんで、教えてゐるの」

「そうなんですネ…妹が…」

I Yがしみじみ言うと、K Mが

「これから、お姉さん達がメイクを教えてあげるから、相談しなさい」

「…はい」

暫くして、

「髪の毛は、どうにかなったわね…T T、メイクの方は？」

「もう、バッチリです」

「I Y、そこにある姿見の前で見てごらん」

「…これが、私ですか？」

「ウン、間違えたわ」「綺麗よ、I Y」

と、二人に褒められた。I Yもまんざらでもないようで、姿見の前でクルッと廻ってみせた。

「I Mさんとか芸能人のボディーガードしてるんだから、ちゃんとメイクしないと…あ、あたし達より、I Mさんの方が私達よりプロなんだから、教えてもらいなさいよ」

「はい…」

「そういや、I Y。I Mさんとか、そのマネージャーさんのU Kさんとかで、メイクの話題とか出ないの？」

「出ますけど…私に対する話ではないと思っていました…確かにI Mの警護でマスコミの取材とか受ける時に、I Mの傍に居る時は、何度もU Kさんにメイクをして貰いました」

「ほら、あの人達…芸能界の人達は、知っているのよ…でも、あんたに遠慮してんじやないの」

「そうなんでしょうか？」

「今度、聞いてごらん？I Mさんは、あんたを妹分と思っているみたいだから、聞いたならあれこれアドバイスしてくれるかもよ」

「はい、そうしてみます」

「行つてらっしゃい」

と、KMとTTに送り出された。

IYは、Y国際港街商店街をY国際港街ショッピングモールに向かって、歩いて行く…心なしに周囲の視線を感じる。以前、国際救護隊のVTとゴシッククロリータ服を着て帝都の街を歩いた時より、人の視線が気になった（巻き込まれ親父の隻眼」参照）。

そんな折、

「よう、そのネーちゃん。どこ行くの？」

と、声を掛けられた。相手は葛葉組の若い衆…お互いに顔を見知った間柄で、普段なら相手はIYの顔を見ると、「コンチハ」くらいしか言わない…IYとHGの師弟関係と、HGと葛葉組のDA親分が親戚である事と…更にエージェントで彼より強い事を知っているので、挨拶程度しか出来ない。

「私は、Y国際港街ショッピングモールへ…」

と、いつもの様に言つて、歩いて行くが、相手はIYとは気づかずに、

「なあ、ネーちゃん。いい所行かない？」

と、ナンパ攻撃を仕掛けてきた。それを聞いたIYは

「はあ？」

と、いつもの塩対応で聞き返すが、相手は怯まず、

「なく、いいじゃんかよ」

と、IYに付きまとつた。そこでようやくIYは、相手が自分の事を判っていないことに気づき、同時に（メイクすると、こんなに変わるんだ…それと、街の品位を落として、この人は…（怒））と、思った。

I Yは、自分の正体を明かして、しつこく付きまとう葛葉組の若い衆と離れようと立ち止まると、

「あのですね…」

と、言い出した時に、

「ハイ、その男性…職務質問宜しいですか？」

と、I Yと葛葉組の若い衆の間に港町水上警察署の捜査官K Jが割り込んできた。

「あ、K Jさん…、あつしは別に…」

と、急にオドオドした態度になり、すぐごと立ち去って行った。それを見送るとK JはI Yに向き直り、

「さ、お嬢さん、もう大丈夫…」

と言って、I Yの顔をまじまじと見て

「…君どこかで見たような…」

と、言った。I Yは呆れて

「警察官が、ナンパをしないでくれますか？」

と、いつもの店内での塩対応する時の口調で言うと、K Jは驚いて、

「エッ、I Yさん？」

と、I Yを指差した。

「…なんですか？私を見て、幽霊か何か見たような顔をして！」

I Yが無然と言うと、

「あ、やっぱりI Yさんだ！こんな所で…」

と言って、化粧したI Yを見て、K Jは驚きと同時にI Yに惚れ直した。

「I Yさん、化粧して何処に行くの？」

「…だから、ナンパはやめてください！公務中ですよね？」

「…はい」

と、I Yに指摘され、K Jは俯いた。I Yは何かK Jが可哀想になり、

「私は、先日I Mに買って貰った服を着て、Y国際港街ショッピングモールへ行くだけの事です」

「あ、そうなんだ！」

と、急に明るくなり、

「じゃ、途中今みたいのが来ない様に、送って行ってあげますよ」

「…だからあゝ、それはナンパですよ」

「いや、公務です」

「どこがですか？」

「自分は、署に帰るので、その通りすがりに、Y国際港街ショッピングモールへ行くだけです…無論、I Yさんをエスコートして」

「そうなんですか？それにしては、先程のあなたの歩いてきたルートは間違いなく、お店（白山亭）に行く様に見えましたが…」

「ギクッ」

「それに、あなたは水上署の捜査官ですよ。ここは港町署の所轄ですよ…あの葛葉組の若い人は、あなたを警察官と知ってるだけで怯えて逃げましたが、本来なら管轄外での警ら行為はダメなのでは？」

「ギク、ギクッ！」

と、K Jが凶星を突かれて、狼狽えると、I Yはフツとため息をついて、

「ま、私をしつこいナンパから救って頂き、ありがとうございます」

「いや…なに、じゃY国際港街ショッピングモールまで、エスコートしますよ」

と、K Jが頭を掻きながら照れると、

「一人で行けます。調子に乗らないでください」

と言って、歩き出した。

「あつ、待つて！」

と言って、K JがI Yの後ろからついて行く…これでは、今度はK Jがしつこいナンパ男かストーカーみたいになった。そこに

『はい、そのナンパ公務員止まりなさい！』

と、後ろからミニパトのスピーカーから呼び止められ、K Jは驚いてミニパトを見ると、ミニパトの車中には、ニヤニヤしてマイクを握っている水上署交通課のM Sが居た。

「…ここは、まだ港街署の縄張りだぞ！ここで公務したらダメじゃないか」

と、自分がI Yに言われた事をそのまま言くと、

「ここは、もう私達の所轄よ！」

「あつ…」

K Jは周囲を見て気づけば、I YとK Jは、港町署と水上署の所轄の境界線である産業道路を渡って、Y国際港街ショッピングモールの敷地に入っていた。

「私は、目的地に着きましたので、もう大丈夫です。お気遣いありがとうございます」

と言って、I Yは深々と頭を下げた。それを見たK Jは、公務中であるのと、M Sの手前、すごすごと、署に向かって歩いて行った。

「さて、大丈夫？あの人、あれでも私達の署の捜査官ですので…」

と、M Sは言って、改めてK Jが付きまとっていた女性がI Yと判ると、

「あら、I Y綺麗にメイクして…それにセンスの良い服ね。I Yと言う服持ってたの？」

「いえ、先日I Mに買って貰いました」

「いいなあ、芸能人のパトロンが居ると…」

「やめてください」

「照れちゃってー(笑)。私も公務中だから、行くわね」

「助けてくれて、ありがとうございます」

「…いや、助けた訳じゃないんだけど(苦笑)…K J君がI Yを諦めて、公務中にナンパをしているのを注意したつもりだったんだけどね…(汗)」

「いえ、あんな奴、本来署から出さない様にしてくれれば、もったいいのですが」

「アハハ(汗)」

I YはM Sと別れて、Y国際港街ショッピングモールを歩く。K JやM Sの言葉もあり、ショーウィンドーに移る自分の姿を時折気にしながら、ショーウィンドーを覗き込んでいると、

「あれ？お前、I Yか？」

と、言われて、声の主を見ると、A MがM Jと居た。

「…A M先輩…それにM Jさん…」

I Yはバツが悪そうに言う。M Jが

「あら～I Y。綺麗にして！もしかして、デート？」

と、ニヤニヤして言うが、I Yは毅然と、

「違います」

と、否定した。A Mも

「エッ？K J君とデートじゃないの？」

と、I Yをイジリにかかるが、I Yは怒って、

「ずえんぜん違います(怒)」

と真顔で否定した。それを聞いた、A MとM Jは顔を見合わせて、肩をすくめる。

「でも、I Y、服とメイクのセンスがいいわよ」

と、M JはI Yを褒めた。

「…やめてください」

途端にI Yは顔を赤くした。

I YはA M達と別れて、また歩き出した。暫く歩くと、I Yは店内にH Gの姿を見つけた。H Gは、Y 国際港街ショッピングモールの洋菓子店の中で、パティシエと何か話し込んでいた。

I Yが入り口で覗き込んでいると、その店員の「あ、いらっしやいませ」の言葉に、振り向いたH GがI Yを見て。

「ン？I Yか？」

「はい、そうです」

「随分お洒落しているが…」

とH Gが言いかけた時にI Yは（親父も、あいつ（K J）とのデートとか言うんだろうな…）と項垂れた。それに対し、H Gは

「丁度いい…チョット、おいで」

「？」

I YはH Gに呼ばれるまま、店内に入ると、

「そこに座って」

と、勧められる席に座った。テーブルの上にはケーキスタンドがあり、そこには焼き菓子が置いてあった。それを見てI Yは首を傾げると、H Gは

「この娘なら、いいモデルになると思うが、どうかな？」

と、パティシエに向かって話しかけた。パティシエの女性は喜んで、

「いいですねー」

と言って、カメラを構えた。それを見たI Yは

「な…、何をするんですか？」

と怯えるが、H Gがパティシエを指して、

「いや、このパティシエさんは、D A親分のお孫さんでな。この店の焼き菓子のモデル…と言つても、手のモデルなんだが…誰かウチの店の人で居ないか相談されていたんだ…I Yお前さん、手が綺麗だし、また今日はキレイなメイクしてセンスの良い服を着ているから、そのまま絵になるから、今ここでモデルをしなさい」

「ナンですと〜！」

I Yはパティシエに指示されるとおりに、焼き菓子を手で示したり、手に持って勧めるような仕草をしたりと、色々な手の表情をした。そして最後に、テーブルから立ち、焼き菓子をもち、いくつかのポーズをカメラに撮られた。

H Gは、パティシエの隣でカメラを覗き込み

「いいねえ…」

と、頷いていた。

「お、親父…これって？」

「ああ、今度ウチの店でもこの焼き菓子を扱おうと思つてね。その宣伝用…最も、今撮影したのは、このお店で使うモノで、ウチの女給服の写真は後日店で撮影する。いやあ、丁度良かった。ありがとうI Y」

「いえ…そんな」

I Yは赤面して、H Gの役に立ったことを喜んだ。

「撮影も終わったので、よろしければ、食べてみてください」

パティシエの勧めに、I Yは焼き菓子を口に入れると、ニツコリと笑って

「美味しいです。ウチのお店はもちろんですが、形も可愛いので、実家のケーキスタンドに置きたいくらいです」

「やったー、貴族のお嬢様のお墨付きを頂いたわ」

と言って、パティシエは喜んだ。

「I Y、お疲れ様。ここで、遅いアフタヌーンティーを楽しんで行こう」

「はい、親父」

暫く、パティシエを交えて、話をしていた。

「今度、このお店で“アフタヌーンティー”セットを出そうと思って…と言っても、お店が狭いので、限定セットになりますけど…で、白山亭サンドウィッチをお店から提供して頂こうとH Gオーナーにお話をしていた所なんです」

と、パティシエが言った。

「そうなんです」

「それで、紅茶はR Rの所の“茶癒庵”から仕入れられるように仲介した。ウチはコーヒーがメインだから、焼き菓子単品とお土産用を仕入れて、レジ横に置くことにする」

「なるほど、そうなんです…妹のKが来たら、お土産に持たせましょう。あと、ウチもケーキスタンドを買ったらどうですか？お店のメニューにスコーンとかありますし、白山亭サンドウィッチとこれらを組み合わせれば、立派なケーキスタンドのセットが出来ますよ」

「…成程ね。考えてみよう…帰ったら、皆でもう少し話を煮詰めてみようか」

「I Yさん、ありがとうございます」

H GとI Yはパティシエのカメラに記念撮影として収まった。

H GとI Yは店を辞して、

「…少し、歩くか？」

「はい、親父」

と、言って、I YはH Gの腕を取った。

「綺麗にメイクして貰ったな…誰だ？」

「はい、T TさんとK Mさんです」

「そうか、良かったな」

「はい…綺麗に化けました」

と、ホントならH Gが言いそうな事をI Yはそれに先んじて言った。

「ハハハ…(汗)」

…後日、I YはI Mにメイク仕方を習いに行く様になった。

●練習艦Y Mと海賊提督

『昨日、B 国の練習艦Y MがY 軍基地に接岸しました。これには、B 国の皇女M M様が乗艦されています。M M皇女様は、現国王の姉で叔母に当たるN M提督の元、この航海でB 国海軍士官となり、ゆくゆくは、叔母のN M提督の後を継ぐことになるのでしょう。また、B 国練習艦Y Mは、先の大戦初期に活躍した我が国の巡洋艦I Zであり、先の大戦中にB 国に払い下げられ、練習艦Y Mとして使われています』

朝のテレビのニュースを見て、H Gは箸を止めた。

「准尉、どうしましたか？」

H Yが訊ねると、H Gは画面に映る練習艦Y Mを指して、

「B 国の練習艦Y M…あれな、俺も乗った事があるんだ」

「…エッ？准尉海軍じゃなくて、陸軍でしたよね？」

と言って、驚くH Yに、H Gは、

「そうだ。行き掛かり上、一時的に乗り込む事になった」

「行き掛り…て？」

「練習艦Y Mが、先の大戦下でC 国新政府…ま、今のC 国政府野党に転落する前の政権下で

の政府軍なんだけど…C国領土内に居座ったN国軍と戦いに俺が赴いた後、皇国に帰る時に乗る事になったんだ…前に話したV Tの後の話だ（「巻き込まれ親父の隻眼」参照）

「B国に払い下げられた旧式巡洋艦になぜ？」

「B国とは…大洋を挟んで古くから同盟関係にある。だから、先の大戦が一時集約した時に、我が国の二等巡洋艦I ZをB国に払い下げ、先の大戦が新たな展開を迎えた時に、皇国とC国の海上輸送ライン防衛に巡洋艦Y Mとして、同型で同じく皇国から払い下げられたI W…後のS Tと共にB国の海軍が運用する形で参戦して来たんだ」

「そうなんですね」

「その時の艦隊司令官が、B国第一皇女のN M少将…今のB国艦隊のN M提督」

「皇女様が司令官？」

「あの国のしきたりとかで、B国は国王一族が三軍の長をそれぞれ担っている。当時N M少将は今の先代の国王の妹が当時提督でいらしたので、派遣艦隊の全権を委任されていたんだ」

「そうなんですね」

「C国のU軍港で、皇国に帰る船に乗るべく待機していた俺とI Iは、酒場で喧嘩していた海軍士官達を止めたら、片方は皇国政府海軍の士官達で、もう一方がB国の海軍士官と水兵達だね」

「エッ？」

「I Iはモップの柄を木刀代わりに、俺は、素手で立ち回ったので、その場で、I IはB国の水兵と士官を殴って重傷を負わせたとかで、俺は、投げ飛ばした士官の一人がN M少将だったとかで、憲兵隊にとっ捕まったが、それがN M中将の目に留ったとの事で、憲兵隊に一時営倉入りになる手前で、引き取られ、N M少将に強制的に仮装巡洋艦Y Mに乗せられて、艦内でそこに居た陸戦兵達に訓練して、ついでに暫く洋上でN国やその同盟国であるK国

の貨物船の臨検にかり出されたり、N国の巡洋艦と撃ち合いをさせられたり…と、いいようにこき使われた」

「何ですか？ソレ？」

「親父、臨検隊に参加したのは、分かりますが。戦艦の大砲を撃ったのですか？」

と、I Yも会話に入ってくると、H Gは苦笑しながら、

「ほら…俺とI Iは、『特別銃器携帯・使用許可証』の上位の『大砲（四十ミリ以上、二百ミリ以下）の使用ならびに取扱い許可証』を持っているから…Y Mの主砲は十五センチなんで、俺達撃つことが出来たから…（苦笑）」

「マジッ！」「なんですとー！」

「ま、後で考えると、B国の海軍は当時近代化の最中で、乗組員も元々操船関係は商船の航海士や機関士だったし、甲板要員や戦闘要員は沿岸漁業の漁師や海賊上がりの連中が多く、皇国も本当は、修練の為に軍人を派遣したいところなんだが、人材不足で人が出せないの、俺らが指導した様なモノだな…で、俺とI IはN少将の事を『海賊提督』なんて悪口言っていたが…営倉に入れられるより、マシだったと思っている」

●海賊提督襲来

「いらつしやいませ…あ、E M大尉」

「こんにちは、I Aさん。H G社長居ます？」

「あつ、ハイ呼んできます。それまでバーカウンターの席にどうぞ」

とI AがE M大尉を案内しようとする、E M大尉の後ろに外国の海軍士官制服を着用した中年の女性と、三人の若い女性が続いた。

バーカウンターでT Tが応対する。

「いらつしやいませ。E M大尉。今日はエスコートですか？」

「そうよ、こちらの方々はB国の海軍の方々です。HG社長いらつしやいますか？」

「そうですか、ようこそ『白山亭』へ、いまオーナーのHGが参ります。それまで、なにかお飲みになりますか？」

と言って、メニューを差し出した。メニューを見た中年の海軍士官は、EM大尉に

「EM大尉、あなたのお勧めは？」

「はい、私は、この白山亭オリジナルコーヒーがお勧めですよ」

「そうですか…では、その白山亭オリジナルコーヒーを…娘達。貴女達も同じでいいわね」

「『イエス、ママ！』」

「はい、畏まりました。EM大尉もコーヒーでよろしいですか？」

「はい、勿論」

TTがコーヒー豆をミルに入れて、豆を挽き、サイフォンにセットした所で、バーカウントアの横の従業員出入り口からHGがいつもの様に襟を正して入ってきた。HGはEM大尉に微笑みながら、

「やあ、EM大尉いらつしやい」

「…先日は、どうも…飛び入り参加をしまして」

と言って、EM大尉はHGに座ったままで会釈をする。

「いえ、いいですよ。KYさんも喜んでいましたから」

二人は先日、岬のプライベートビーチでの話をする。（「巻き込まれ親父の海難」参照）

「今日は…エスコートですか？それにしても、海兵隊の貴女が外国の士官を当店に…？」

「はい…、基地の士官クラブハウスで飲んでいる内に意気投合しまして…（苦笑）」

「ハハ、そうですか」

「あ、紹介しますね。こちらは、昨日当Y海軍基地に入港したB国の練習艦YMに御乗艦されています。B国第一皇女MM様、B国海軍提督NM大将与、同じくYMの艦長LM少佐。

それから、B国海兵隊隊長のOM大尉」

HGはEM大尉の紹介する中年の海軍士官を見て、

「初めまして…と言うより、お久しぶりですな。NM少将…今は提督でしたか」

とHGがNM提督に嫌味を込めて言うと、EM大尉は驚き、

「エッ？HG社長ご存知でしたの？」

「はい、この方のお陰で…散々な目に…」

とHGがゲンナリして答えると、NM提督は、

「ン、もう…ダーリンったらあ。私の事を二度も押し倒した癖にい…」

と身悶えする様な発音で言うと、HGはムツとして、

「酒場で、喧嘩になって投げをうっただけでしょう…」

とHGが言った所に、店内で女給服姿で接客していたHYとIAとバトラースーツ姿のAMが慌ててバーカウンターに来た。

「でも、その後で寝技を決められて、あの夜の二人供燃えたわね…その時の子よ、この娘達」

とNM提督が、照れるように言うと、

「『准尉…！(怒)』」

途端に、TTとHY達娘の嫉妬の眼がHGとNM提督に注がれる。NM提督は、

「ほら、お前達。本当のパパよ。ご挨拶なさい」

と、シレっというと、他の三人の士官達が

「『パパ、初めまして(笑)』」

と言って、挨拶をした。途端にHGは慌てて、

「ライ！NM！！押し倒したとしても、回数と子供の人数と年齢が合わないぞ！」

と、反論するが、真っ向からの否定ではなかったので、TT達は（認めるんだ！(驚)）と、

H Gをジト目で見つめた。それを見てN M提督は悪ノリして、

「…それは、私とダーリンとの愛の結晶の子供だから…」

H GはN M提督のノリにタジタジとなり、またT T達の嫉妬の目線の集中砲火を浴びていた。

「あのな！そこに居る三人の娘の一人は、皇女M M様だろ？」

と、H Gが言うと、N M提督は舌を出し、

「あら…バレたわね(笑)」

『あら…』じゃねえ！たった今、E M大尉が紹介したろ…それに今朝テレビで観たぞ」

「アハハ…漫才もここまでにしましょ…。改めて、H Gお久しぶり」

「…N M提督閣下…相変わらず御冗談にも程があります」

と、H Gが呆れ顔で言うと、(漫才なんだ…って、これって夫婦漫才?)とT T達は思った。

「やれやれ…、本線に戻ったか…で、ナニ用ですか？」

「私は喫茶店に来たのだから、お茶しに…」

と、相変わらずのN Mのノリに、傍らで観ていたA Mは(…あの、テンポとノリ…見習わないと…って、ヲイ)と一人乗り突っ込みをする。

「では、ご注文をどうぞ」

と言って、H Gはメニューを提示した。

「もう頼みましたよ」

「あ、お待たせしました…当店百年の歴史を誇る創業者であるここに居る当オーナーの曾祖母が苦心したコーヒー豆の配合を忠実に守り続けた一杯をどうぞ」とT Tが慌ててコーヒーを出した。

「…あら、H G。あなた、ご実家が喫茶店でしたの？」

「…成り行き上、私が後を継ぎました…」

とH Gが澄まして答えた。N M提督は頷くと、

「ここにいる、E M大尉から聞きましたが、この喫茶店の他にエージェント会社もしている
そうで」

「はい」

「それも、腕前はE M大尉率いる海兵達に引けを取らないとか…」

「そうですかね」

とH Gがしらばっくれて答えると、

「アハハ(汗)」

とE M大尉は苦笑した。

N M提督は、出されたコーヒーを一口味わうと

「…あら、我が国もコーヒー栽培が盛んで、艦でも毎日コーヒーを飲むけど、このブレンド
はまた格別ね…我が国のコーヒー豆を使っているのは判るけど…あとP国とかO連邦の豆
もブレンドされているのかしら…」

「企業秘密です」

「あら…」

その後、N M提督は一方的に、先の大戦末期の自分とH Gの思い出話をしようとするが、
H Gは生返事を繰り返し、話に乗らず、却って嫌がり、N M提督の話を避けていた。それを
聞いていた、T TとE M大尉は、欲求不満になり、H Yはある程度H Gから話を聞いていた
ので、接客に戻り、A M達もH Yの指示で接客に戻った。

H Gが自分の話に乗り気ではなく、却って、はぐらかしたり、避けるような返事ばかりな
ので、これ以上話しても無駄と考えると、ため息をついて席を立ち、

「美味しいコーヒーを御馳走様。明後日には、出航の予定…その前に遊びにいらっしやいな。

国賓待遇するわよ」

と、H Gを練習艦Y Mに誘うが、

「…」

H Gは全く乗り気でないので、N M提督はキレて、

「来なさい！」

「前向きに…対処します」

「来い！でないと、あの事ばらしますよ！」

N Mの命令口調に、H GはかつてY Mに乗艦していた頃を思い出し、

「イエス・ママ」

「あ、その際にアンタの所のエージェントも招待するわよ」

「それも、前向きに…」

「連れて来なさい！」

「イエス・ママ…(泣)」

それを見ていたH GのT T…(准尉って、あの提督に何か弱みでも握られているの？それとも、あそこにいる三人の娘の内、誰かが実の子供とか…)と勘繰った。

…いえ、昔Y Mに乗艦していた頃に、N Mに襲われてチェリーボーイを卒業したためです。

公開されると、国際問題になりかねます。作者

●大きな罠

Y海軍基地に来たH Gとその息子娘達とX姉妹…H Gは息子娘達だけにしかかったが、

「「。パー、軍艦が観た…いい！」」

と、X姉妹に泣きつかれて、仕方なく連れて行くことにした。Y海軍基地守衛門でN M提督からの練習艦Y Mに招待された旨を話すと、Y海軍基地のワゴン車が守衛門に回され、中か

らNM提督自身が出迎えた。

「待ってたわよう、ダーリン！さあ、乗って」

NM提督に押し込まれる様にワゴン車に乗せられたHG一行、練習艦YMのタラップ横に停車した。そこにはOM大尉が部下の海兵隊を従えて、HG達に捧げ銃をして出迎えた。

NM提督が答礼をすると、海兵隊は、銃を降ろした。

NM提督が先導して、HG達がYMのタラップを上がると、“サイドパイプ（号笛）”が甲板に鳴り響き、LM艦長ならびに、そこに居た士官ならびに水兵達皆敬礼をした。NM提督はHGに向き直り、

「ようこそ、当練習艦YMへ、ダーリンの乗艦を心より歓迎しますわ」

と言って、敬礼をした。HGは陸軍式の敬礼をして答礼すると、LM艦長が

「パパ…艦内を案内します。こちらへ…」

「また、この艦の甲板を踏もうとは思っていなかった…」

とHGがボソリと言うと、LM艦長は

「パパお帰りなさい(笑)」

「あのですね…」

LM艦長自らYM艦内を、HG達を連れて説明をする。HGはこの練習艦YMを知っているで、無言でいたが、息子娘共、特にX姉妹ははしゃいでいた。

B国練習艦YMブリッジ内：

NM提督は、ブリッジに入るなり、

「さてと、直ちに起航！気づかれない内に、とっとと外海に出るわよ！」

「イエス・ママ」

と、LM艦長に代わり、副長が出航の指示を出した。

「もやい綱外せ！碇を上げる！急げ！」

「舵面舵五、左舷前進微速！」

「左舷前進びそく。アイ」

と復唱して、航海士がエンジンテレグラフを操作し、

「おゝもかゝじ五。アイ」

と復唱して、操舵手が舵輪を回した。

●出航

HG達が練習艦YMの艦内を案内され、デッキに出ると、YMはいつの間にか岸壁を離れて、外洋に進路を向けていた…余りにも静かに出航したので、HGは気づかなかった。HGは驚き、そして狼狽え、

「LM艦長…これは、一体？」

「はい、その件につきましては、提督がお話しますわ。司令官室にご案内します」

と、LM艦長が澄まして言うと、HGは（しまった！また謀られたか！……そうはさせるものか）と、HGはここに来るまでに作成したメールを送信した。

練習艦YM司令官室…

「提督、LMです。パパ達をお連れしました」

「どうぞ、お入りなって〜」

と中から、NM提督の声がして、LM艦長が司令官室のドアを開けるなり、HGが飛び込み、「ライ！NM提督…これは、一体なんの真似だ！三十年前みたいに、俺をだましたな！」と、執務デスクまで歩きながら言って、最後に執務デスクの上をバン！と叩いた。

「あらあ、ダーリンつれないのね…あなたと私の愛の逃避行じゃない」

H Gの抗議に、N M提督は動じることなくシレつと言うと、後から入って来た息子娘共とX姉妹は、

「「「准尉く！」」「「バ。パー」」

と言って、嫉妬の視線をH Gの背後から送る。それをH Gはお構いなしに、

「あの時も、『私を投げ飛ばした罪で、甲板掃除ね』って言って、俺とI Iが甲板掃除始めたら、勝手に出航して逃げられなくした挙句、好き勝手命令して、お前さんに逆らえない様にしやがって！」

と、昔の事を言うと、H Yは

「あ、それで…」

と驚き、妙に納得した。

…それ以外もあります。作者。

N M提督は、H Gの抗議を聞いて、ため息をつくと、

「ま、冗談はこれまでにして…実は、ダーリンに仕事の依頼をしたくて…」

「まさか、B国まで連れて行く気じゃ…」

「そこまでは行かないわよ。チョット、P国領まで」

『「チョット、P国領まで」って、チョットどころじゃないぞー！」

とH Gが言うが、N M提督はお構いなしに、

「実はね、最近P国沿岸で、我が国の商船が度々海賊に襲われてるの」

と、本題を困った顔で言うと、H Gが

「…まさか、それを討伐しろと？」

と、怪訝そうに言うと、N M提督は途端に明るい顔をして、

「ピンポーン！ダーリン愛してる。キスしてあげる」

「えゝい、要らんわ！」

「あらゝあ、つれないのね」

と残念そうに言った。H Gは、P国まで行く気がないので、どうにかして帰して貰おうと、

「で、海賊討伐にいくら出す？」

と、報酬を吹っ掛ける事で諦めさせようとする、

「ま、こんなものね…」

と、N M提督はデスクの電卓を叩き、H Gに提示した。それを見たH Gは嫌味を込めて、

「…この金額って、まさかB国の通貨レートか？」（B国の通貨レートは、皇国の百分の一です。作者注）

「まさかー、皇国の皇園よ…破格でしょ」

H Gには、ぐうの音もでない金額だった。それでも、諦めないH Gは、

「この金額なら、P国内で傭兵雇った方が、安上がりじゃないの？」

「P国現地の傭兵ならね…でも、連中信用できないから…」

「…で、やったんだ…」

「エエ…、あいつら金だけ貰うと、海賊に寝返るは、逃げ出すわで…ロクに働かなくて」

「それで、俺達に？」

「ええ、これも神様の思し召しね。Y海軍基地に入港して、偶然、士官クラブハウスでたまに臨席したE M大尉と意気投合して、Y海軍基地の傍であんと再開するなんて…やっぱり、ダーリンと私は運命の赤い糸で結ばれているのよ…愛してるわ」

と、言ってN M提督は手をH Gに合わせた。

「えゝい、ウザいわ！」

と、反発して言うH Gを見た息子娘共は、（冷静でえげつない親父にしては、珍しい！）と思った。

「アン、つれないんだから」

「…だとしても、俺とウチのエージェントだけじゃ人手が足りんが？」

「それは…ダーリンとエージェント達に、こちらのOM大尉以下、この艦に乗っている海兵隊を鍛えて貰うから…」

「ナニ？」

「ほら…昔、あんたとあんたの部下…II君だっけ？ウチの乗組員鍛えて貰ったじゃないの」

「…あれを、またやれと？」

「そうよ」

とNM提督が妖しい目つきでHGを見つめた時、NM提督の執務デスク上の内線電話が鳴った。NM提督は受話器を取りざまに、

「ナニ？折角いい所だったのに」

『ブリッジです。提督！皇国の海上警備庁の巡視船が近づいてきます』

「副長、ここはまだ皇国領海内だから、抵抗しないで。今ブリッジに上がる」

NM提督は内線電話の受話器を置くと、HGに対して、

「ダーリン達も来て」

「ハイハイ…」

皇国海上警備庁第三管区所属、巡視船Mブリッジ内…

「艦長、B国練習艦YM捕捉しました」

「停船命令を出せ！」

「ハイ、停船命令を出します」

「練習艦とはいえ、かつての我が国の二等巡洋艦だな…威厳がある」

「そうですね、艦長」

B国練習艦YMブリッジ内：

ブリッジに入るなり、NM提督は、そこに居る副長に、

「どうした！」

「はい、後方の皇国巡視船Mから、停船命令を受けました」

「あら…ダーリンを連れ去ったのを気づかれたかしら…」

「ワイ」

「航海士、両舷減速・停船。総舵手、舵そのまま」

NM提督が直接命令を出した。

「イエス・ママ」

「両舷減速・停船！」

と復唱して、航海士がエンジンレグラフを操作した。

「舵、そのまま！」

と、操舵手が復唱する。NM提督は、

「艦長、皇国巡視船Mから臨検隊が来るから、対応をお願い！くれぐれも失礼のない様…」

「イエス・ママ」

皇国正規海軍O県領地海軍基地所属、駆逐艦HTブリッジ内：

「艦長、進路上に巡視船MとB国の練習艦YMが居ます」

「ウム…」

「B国練習艦YM減速中、巡視船Mと距離を詰めます」

「この狭い水路で、何をしようとしている？」

「そうですね」

と、艦長と副長が双眼鏡を見ていると、そこに

「…もうじきY海軍基地だが。到着時間は？艦長」

と言って、A T中佐がブリッジに入ってきた。それを見た艦長の少佐は、

「あ、A T中佐」

と言って、敬礼をした。A T中佐は答礼を返すと、前方を見ながら、

「何かありましたかな？」

「今のところは…ただ、この辺りは水路が狭くて…」

と、艦長が言ってる最中に、

『こちら、C I C（戦闘情報センター）。B国練習艦Y Mと巡視船M後方に、強襲揚陸艦O Sを認む』

とブリッジ内のスピーカーからアナウンスがあった。

「ナニ？」

艦長とA T中佐は、慌てて双眼鏡を構えた。艦長は冷静に

「航海士、両舷減速！」

と指示を出す。航海士が復唱して、

「りょくげん、減速！」

「操舵手、面舵十」

「おもかーじ、十アイ！」

「ヨーンロー！」

「ム？…あれは、B国の練習艦Y Mではないか！」

とA T中佐が呟いていると、O T殿下がブリッジに入ってきて、

「A T中佐、なにかありましたかな？」

「あ、これはOT殿下。現在、前方で渋滞が発生しているので、減速している最中です」

「艦長に報告！巡視船MはB国練習艦YMに停船命令を発しています」

とフライングブリッジの水測員から報告が入った。

「何だと？」

と、艦長が言うと、OT殿下は

「停船命令とは、穏やかではないですね」

「そうですね」

と、AT中佐も同意して、艦長に対して、

「艦長、一応こちらの所属並びに任務を各艦へ通達」

「はい」

皇国正規海軍Y海軍基地所属、強襲揚陸艦OSブリッジ内…

「艦長、進路上にB国練習艦YMと巡視船Mが居ます…また、前方一時の方向に味方の駆逐

艦HTが接近してきます」

「駆逐艦HTから、入電！『我、OT殿下御座乗。入港優先ト認ム』」

「そうか…。粗相のないように。航海士、両舷減速！面舵十！」

「りょくげん、減速！」

「おゝもかゝじ、十」

狭い水路の中で、外洋型巡視船、B国練習艦…と言っても元皇国政府海軍の二等巡洋艦、それに強襲揚陸艦と駆逐艦が接近して、衝突の危険性があった。

Y海軍基地水路管制室…

「B国練習艦Y M、巡視船Mならびに、強襲揚陸艦O S、駆逐艦H Tに達する。こちら、Y海軍基地管制室…四艦艇は現在非常に接近しつつあり、全艦艇直ちに減速！…繰り返し…」

練習艦Y Mブリッジ内…

「Y海軍基地水路管制室より、当海域付近の艦艇に一斉通知『直ちに減速』」

通信室からの伝声管から通達が上がって来た。それを聞いたL M艦長はN M提督に対して、

「提督！」

と叫んだ。N M提督はL M艦長の慌てぶりを諫める様に、

「艦長、指示に従え、狼狽えない！元々こつちは停船命令を受けてんだから…航海士、両舷直ちに逆進！停船する」

「イエス・マム。航海士、両舷逆進！停船」

N M提督の命令より副長が、各所に指示を出す。

「操舵手、舵そのまま」

「イエッサ、舵そのまま」

「航海士、両舷逆進・停船！」

「イエッサ、両舷逆進・停船」

と復唱して、航海士がエンジンテレグラフを操作した。

皇国海上警備庁第三管区所属巡視船Mブリッジ内…

「艦長、B国練習艦Y M減速。停船する模様…Y海軍基地水路管制室より、減速指示が出ています」

「…だろうな、この狭い湾入り口では。総舵手、進路そのまま。航海士、両舷更に減速。B

国練習艦Y Mに近づけ」

「艦長。接近する駆逐艦H Tより、入電『我、O T殿下御座乗。入港優先ト認ム』」

「…なんだって！こんな時に…御召し艦ならやむを得んな。一応こちらの意図を伝えておけ」

「ハッ」

皇国正規海軍Y海軍基地所属、強襲揚陸艦O Sブリッジ内…

「艦長、こちら通信室。Y海軍基地水路管制室より、即時減速指示が出ています」

「航海士、両舷逆進！停船する」

「りょーげん、逆進…停船」

「総舵手、舵戻せ。このままだと、丘に乗り上げる」

「舵、もどせ」

『艦長、こちらフライングブリッジ。前方のB国練習艦Y Mより旗旒信号並びに発火信号…』

『ワレ停船に応じる』

「何だと！この狭い湾入り口で…航海士！直ちにこちらも停船！！」

「りょーげん、全速逆進！停船」

「巡視船Mより、入電『B国練習艦Y Mに密航者アリ』」

「…そう言う事か…なら、巡視船Mの任務が優先だ。様子を見よう…」

「駆逐艦H Tより、入電『我、O T殿下御座乗。入港優先ト認ム』」

「んな事言ってもなあ、本艦が邪魔で入港どころじゃないぞ」

「どうしますか？」

「Y海軍基地水路管制室からの指示を待つ」

「はい」

皇国正規海軍〇県領地海軍基地所属、駆逐艦HT…

「航海士、更に減速。入港優先だが、強襲揚陸艦OSが邪魔だ。停船しよう」

「りょくげん、逆進！停船」

「巡視船Mより、入電『B国練習艦YMに密航者アリ』」

「はて…密航者と？」

とOT殿下が言うと、AT中佐も首を捻り、

「そうですね殿下」

「殿下…最悪、こちらが後退して、別の水路からの進入か、運河に遠回りする事をお許しく
ださい」

「艦長、私は構わないが…それより、B国練習艦YMに密航者が居るのであれば、逮捕に協
力してあげなさい」

「ハッ」

Y国際港とY海軍基地がある湾と外洋との境の一番狭い水路付近で、渋滞が発生した。練
習艦YMは行く先を駆逐艦HT、後方を強襲揚陸艦OSに挟まれ、巡視船Mが接舷すべく近
づいて来ていた。

皇国海上警備庁第三管区所属巡視船M艦内臨検隊待機船室…

「ビー、本艦はB国練習艦YMに近づきつつあり、海上保安官臨検要員は移乗用意…繰り返
す…」

「やれやれ、こんな狭い所で臨検かね」

と、巡視船Mの臨検隊隊長WYは、装備を確認しながら愚痴を言った。

「お前達、早くしないと、湾内で大渋滞が起きるよ」

「「はい」」

装備を整えながら、WYは（…つたく！いつたい、HGオーナー何を考えてんでしよう…練習艦YMの乗っ取りなんて…）と思った。

…それは、およそ一時間前に遡る。WYのスマートフォンに一通のメールが入った。差出人はHG：

『B国練習艦YMに乘せられ、強制的に外洋に連れ出される。最終手段としては、乗艦されているMM皇女様を人質に、自分と弟子達六人で、こちらでYMを乗っ取り、港に戻すつもりであるが、それはあくまで最終手段。については、我々が手を下す前に逮捕してオカに戻して欲しい…また、親戚の子供二名も同行』

これを見たWYは、最初、練習艦YM乗っ取りは、例えHGオーナーでも、いくら何でも…と思ったが、過去のHG達の腕前を思い出し、Y国際港にある海上警備庁第三管区司令部に「B国練習艦YMに密航者が居るとの内通があったので、身柄拘束に向かわせて欲しい…」と掛け合って、巡視船Mの緊急出航を取り付けたのである。

『ビー、ボート降ろせ。保安官は移乗急げ！繰り返す…』

艦内放送が、WY達臨検隊が控える後部デッキに鳴り響いた。

「ボートに移乗急げ！」

「「ハイ」」

皇国正規海軍O県領地海軍基地所属、駆逐艦HTブリッジ内：

「殿下、この度のB国練習艦YMにはMM皇女様が御乗船あそばされているとか…」

とAT中佐が言うと、OT殿下が、

「おお、そうかね。停船したついでに、あちらへ伺ってご挨拶したいが、どうかな？艦長」

と呑気に言った。艦長は、少し考えて、

「…そうですね…この渋滞状況では、どうしようもありませんから…Y海軍基地水路管制室から許可が出るのであれば、よろしいと考えますが…」

「では、決まりだ。艦長、その旨、B国練習艦YMとY海軍基地水路管制室に打診してくれ給え。それから連絡艇を用意してくれ。私と殿下が表敬訪問をする」

とAT中佐が言うと、艦長は、

「畏まりました。甲板長、連絡艇用意」

「はい」

Y海軍基地水路管制室…

「駆逐艦HT発、B国練習艦YMに達する。『貴国練習艦YM乗船ノMM皇女ニ対シ、本艦乗船ノOT殿下ヨリ、表敬訪問ノ希望アリ、移乗許可求ム』」

それを聞いて、管制官は驚き、頭に血が昇って、

「何だとー！この異常事態に」

と叫ぶが、指揮官は落ち着いて、

「…管制官。許可を出したまえ。同盟国にOT殿下が敬意を払われているのだ。まずは、強襲揚陸艦OSを後方に下らせよ」

「了解しました。こちら、Y海軍基地、水路管制室…」

皇国正規海軍Y海軍基地所属、強襲揚陸艦OSブリッジ…

「駆逐艦HTより、入電。『B国練習艦YMニOT殿下表敬訪問ス。貴艦にオイテ、乗艦ス

ル海兵隊ヨリ護衛ノ要員ヲ求ム』

「エッ？ OT殿下が、B国練習艦YMに表敬訪問だとか？ この異常時に…。道路で言えば、狭い道で、タクシー同士が道を譲りあおうと言うときに、乗っている客同士がお互い顔見知りだから、降りて挨拶するのと違うんだが…」

「ハハ、言いえて妙ですな。艦長」

「副長、乗艦している海兵隊第三海兵団から、一分隊割いて、連絡艇でYMに向かう様に指示」

「了解です。…こちらブリッジ。海兵隊第三海兵団へ、EM大尉直ちにブリッジへ」
『了解しました』

「Y海軍基地、水路管制室より、『OSハ直ニ後退セヨ』との連絡です」

「通信士、〃現在OT殿下ヨリ警護要員ノ依頼アリ。後退ハソノ後〃と伝えろ」

「ハッ、こちら強襲揚陸艦OS。本艦は…」

Y海軍基地水路管制室…

管制官は、強襲揚陸艦OSからの電文を受け、

「あゝ、もう！ 皇族のお戯れもいい加減して欲しい！」

と言って、管制官は頭を抱えた。それを見た指揮官は

「おい、今の言葉。音声記録から削除しておけ！ OT殿下は温厚な御方だが、軍令部から不敬罪に問われる可能性がある」

「ハイ」

皇国正規海軍Y海軍基地所属、強襲揚陸艦OSブリッジ…

「EM大尉入ります」

EM大尉は、ブリッジに行くと、艦長に敬礼した。艦長は、答礼すると、

「早速だが、EM大尉。あれを見てくれ」

と言つて、艦長は前方を指した。

「…停船してますね。この狭い所で…」

「見て見ろ」

と言つて、艦長は、双眼鏡をEM大尉に渡した。

「…あれは、B国の練習艦YMと巡視船Mですね。巡視船Mから臨検用の移乗ゴムボートが練習艦YMに向かっていますが、なにかありましたか？」

「B国練習艦YMに密航者が居るとの情報だ」

「…それで、ですか？私が呼ばれたのは？巡視船Mの臨検隊で十分では？わざわざ我々海兵隊が行く必要も…相手が凶悪犯なら、行きますが…」

と、EM大尉は自分がブリッジに呼ばれた意図をそう解釈して答えた。

…多分、密航者にされているHG達は凶悪犯並みの腕前を持ってます(笑)。作者

「EM大尉、君を呼んだのは、その先だ」

「？」

EM大尉は、艦長の指示に従い、練習艦YMの更に先を見て、

「…あれは、味方の駆逐艦…識別番号からするとHTですか…O県領地正規海軍基地所属艦がなぜここに？」

「O県領地から、OT殿下が御乗船あそばされている」

艦長の言葉に、EM大尉は、駆逐艦HTのマストに皇族旗があるのを確認すると、

「成程。殿下は空路より海路がお好きな方ですから…」

と皮肉気味に言った。それを聞いた艦長も頷くと、

「ま、そうだな…で、命令」

「ハッ」

「前方の駆逐艦HTから、急遽、OT殿下がB国練習艦YMに移乗され、乗艦されているM皇女様に対して表敬訪問をする事になった。ついては、警護に人を出して欲しいとのご要望だ。連絡艇を降ろすので、一分隊を率いて、B国練習艦YMに向かつて欲しい」

「ハッ、一分隊を出します」

「甲板長、高速連絡艇を用意しろ！」

「了解」

EM大尉は、ブリッジを出て、艦内の海兵隊員待機船室に向かいながら、

「…OT殿下も、こんな狭い所で御酔狂を…本来なら、登舷礼ぐらいするかもしれないけど…EY伍長の分隊を連れて行くのでしょうか」

Y海軍基地水路管制室…

「強襲揚陸艦OSからです。『我、OT殿下護衛要員ヲ移乗サセルタメ、高速連絡艇ヲ発進ス』」

「…ウム。強襲揚陸艦OS宛て、『発信後、直二後退！海路ハ既ニ動脈硬化状態ナリ』

「ハッ（動脈硬化…と言うより、便秘なんだが…）」

●HG逮捕される。と、めんどくせー

YMに臨検に向かう巡視船M搭載のゴムボート上…

「何ですって！OT殿下がYMに表敬訪問？」

巡視船Mと連絡を取り合っている部下からの報告にWTは仰天した。

「艦長より、『直ちに、密航者を捕らえて。安全を確保せよ』との命令です」

それを聞いて、WYは（うわ、こりや大変だ！HGオーナー達、OT殿下に知られたら、

下手すりゃ軍刑務所行きだよ」と蒼くなった。

… W YはO T殿下とH Gの仲を知りません。作者

「W Y隊長。Y Mは左舷のタラップを降ろしています」

「分かった！そちらに着ける」

「ハッ」

W Yの乗ったゴムボートは、Y Mのタラップに接舷した。W Yは「行くぞ！」と号令をかけ、先頭を切ってタラップを駆け上がった。

甲板上には、艦長のL M少佐が出迎えた。

「皇国海上警備庁第三管区巡視船M所属海上保安官のW Yです」

「私は、当B国練習艦Y Mの艦長、L Mです」

「乗船許可並びに、密航者の通報がありましたので、こちらにお引渡し願いたい」

「乗船を許可します…が、密航者？はて…（エッ？誰）」

「通報では、我が国の国民であるH GとH Gが経営する会社碇屋の従業員六名ならびに一般人二名と受けている」

「…（エ）、H Gさん達の事じゃない！…あれ？一般人二名ってナニ？一番年の若い女の子達の事？」

「返答は如何に？」

「…はい、確かにH Gと申す者とその会社の従業員達が乗船していますが、それは、当艦に乗っている提督のゲストとして…それから、一般人二名については、なんの事やら…」

と言って、L M艦長が首を捻りながら言うと、W Tは

「全員で八名と通報があった。間違えないですか？」

「確かに、H G氏と従業員合わせて八名ですが、一般人って…？」

「双子の学生が居るはずだか？」

「エッ？あの子達。従業員ではなくて、一般の学生さんなの？」

と、LM艦長は驚いて、素で話をした。それを聞いたWYは（…あの子達（X姉妹）、なに誤魔化しているんだか…）と顔をしかめた。

「成程、なにか行き違いがある様ですが、こちらにお引渡し下さい」

「今、提督に問い合わせます」

と言って、LM艦長は慌てて、持っている艦内無線機でNM提督に報告した。

B国練習艦YMブリッジ内…

LM艦長から報告を受けた、NM提督は

「あらゝ、ダーリン密航者にされてしまってるわ。どうしましょ」

「…素直に、引き渡してくれ」

「そんな…あつ、ダーリン謀ったわね！」

と、NM提督がHGを責める様に言うと、HGは

「…バレたか」

と言って、下を出した。それを見た提督は怒って、

「私はダーリンを素直に返す気はないわよ！」

と、言った所で、通信室から、

「提督！前方の駆逐艦より入電『貴艦ニ乗船アソバサレテイルMM皇女様ニ対シ、本艦乗艦ノOT殿下表敬ノ意志アリ。乗船ヲ許可ネガウ』です」

それを聞いた、NM提督は、

「…あら、まあ…どうしましょ」

と言って、思案顔になるNM提督を尻目に、HGは（ナニ？OT殿下が！これは僥倖だ！家に帰れる）と思って、ほくそ笑んだ。それを見とがめたNM提督は、手を挙げると、ブリッ

ジに居た士官達が腰の拳銃を抜いた。

「返さないわよ。ダーリン…皆さんを船倉へ」

と言うと、H Gは薄笑いを浮かべ、

「今度は、そうはいかない！」

と言って、H Gも懷から拳銃を抜くと、N Mの後ろに回り込み。N Mの首に腕を回すと、N Mの額に拳銃を突き付ける。同時にH Y達は拳銃を抜いて構えた。

…ちなみに、X姉妹もH Gから拳銃を事前に渡されています…弾丸入れてませんけど…

(笑)作者

「あら、ダーリン、ここはブリッジ内よ、熱い抱擁はやめて…みんな見てるわ。それに、腕は腰か胸に回すモノよ」

「…相変わらず口が減らんなあ…」

H Gが呆れて言う、N M提督は観念して、

「ハイハイ、判りました。ここは我が国海軍の明日を担う若い者も居ますし、皇女殿下もいらっしゃるの…皆、銃を降ろして」

「…しかし…」

「いいの…、ダーリンは、私を含めて皆を撃たないから…もともと、私はダーリンに後で美味しくいただけるつもりだけど」

と言うと、H Gは(どうも、この南半球独特の情熱的なノリは暑苦しいな…)と思って、ゲンナリした。

ブリッジに居る士官達が構えていた銃を降ろすと、H Y達も銃をしまった。

「それにしても、ダーリン。よく皇女殿下を人質に取らなかったわね」

と、N M提督は、H Gに尋ねると、H Gは

「B国と我が国との同盟関係は保たないとね…それに、皇女殿下は足が竦んでおられる様

で…」

「分かつちゃった？」

「あのな」

そこに、LM艦長に案内されて来たWYが、ブリッジに居るHG達を見て、

「HGオーナーとその従業員達、密航者として身柄を拘束します。さ、お家に帰りますよ」

と、こめかみをひくつかせながら、WYがHGに拳銃を構える。HGは素直に手を挙げて、

「はい、早く捕まえてください」

「ダーリン…」

B国練習艦YM後甲板上…

「WY隊長。OT殿下が乗られている連絡艇から、『現状況を報告せよ』と…」

「…判りました。『密航者は確保したので、艦内に問題なし』と報告しろ」

「了解。こちら海上警備庁第三管区巡視船M臨検隊…」

皇国正規海軍O県領地正規海軍基地所属、駆逐艦HT搭載連絡艇…

「殿下、密航者は確保されたようです」

「AT君。ではYMに伺おう」

B国海軍練習艦YMブリッジ…

「提督、パパ…いや、HGさん達密航者として捕まっちゃいましたね」

と、LM艦長が言うと、NM提督は相変わらず、

「そうね…折角南の島でダーリンとの愛のバカンスを楽しもうと思ったのに…」

と言うと、LM艦長は困り顔で

「ママ…まだ、HGさんを『ダーリン』と呼んでいるの？おふざけもいい加減にして…亡くなったパパが聞いたら悲しむわ」

と言うと、NM提督は、LM艦長に対して、

「ブリッジでは、『ママ』と呼ばないの！」

「イエス・ママ」

「それに、私はダーリンと再婚して、あなた達の新しいパパに向かえるのもまんざらでもないと思っているのよ。三十年前にダーリンをチェリーボーイから卒業させた仲だし」

「…ママ…いや、提督…」

とLM提督が言いかけた時に、

「NM提督。皇国のOT殿下の御座乗の連絡艇が接舷します」

「今行く。総員荣誉礼！」

「『イエス・ママ！』」

やがて、OT殿下がAT中佐の先導でYMのタラップを上がると、『サイドパイプ（号笛）』が甲板に鳴り響き、NM提督、LM艦長ならびに、そこに居た士官、水兵皆敬礼をする。

「ようこそ、当練習艦YMへ、殿下の御来訪を心より歓迎いたします」

「いや、突然の事で恐縮します」

OT殿下の答礼に、NM提督以下が直ると、続けて

「本来は、MM皇女殿下もこちらで殿下をお迎えするところですが、皇女殿下は、現在当艦のゲストではなく、一士官候補生と乗艦されておりますので、ご無礼をお許しください」

「いや、構いません」

「皇女殿下は、現在ガンルームにおられますので、ご案内いたします」

「ウム」

N M提督がO T殿下とA T中佐をエスコートしようとした時、ちゃっかり、H Gが声をかけた。

「あ、O T殿下…」

H Gの声に驚いて、O T殿下とA T中佐が立ち止まった。H Gと息子娘共とX姉妹を確認して、O T殿下は、

「おや、H G殿ではないですか。どうしてここに？」

と直接尋ねてきた。H Gは恐縮しつつも、

「はい、私が件の『密航者』らしいです…正確には、ここに居るN M提督に拉致されて来ましたが」

と言うと、O T殿下はN M提督に向かって、

「…そうなのですか？N M提督」

「…はい、申し訳ありません（ダーリンなに、余計な事を…）」
と、カチンときて、H Gの前に立つと、

「なんで、ダーリンがO T殿下を御存じなの？」

「…ウチの顧客」

と言って、H Gが舌を出すと、

「チッ…」

「…今、舌打ちしたろ」

「あら…スズメかしらねえ」

「誤魔化すな、海にスズメはおらん！」

「はいはい」

「どういう事か、説明願いますか？H G君」

A T中佐が、O T殿下の前に出て、H Gに問い質した。

「ハッ、私とNM提督とは、古い知り合いで、昨日、NM提督がそこに居る海兵隊のEM大尉のご案内で、お忍びで当店に御来訪された折、当艦にご招待を受け、社員と親戚の子供を伴い訪問をしたところ、突然の出航に驚き、慌てて海上警備庁の知り合い…あ、そこに居る巡視船Mの臨検隊隊長のWYさんに、私身自ら通報し、*“救出”*を依頼しました」と言くと、EM大尉とWYは目を丸くした。AT中佐は、

「…『救出』？はて。私は*“密航者”*が居ると聞いていますが」

「ハイ、それは私の方便…と言いますか…NM提督に謀られ、正式な手続きなしで海外に連れ出されそうになったので、『密航者』として自らの救助を通報しました」

「…成程」

それを横で聞いていたWYは、（嘘だ、『密航者』と司令部に通報したのは私で、HGオナー自身は*“乗っ取り犯計画犯”*なんだけど…えげつなく）と思って苦笑した。

「NM提督、ご説明願えませんか？」

今度はOT殿下がNM提督を問い質した。

「はい、正直に申します…我が国の商船がP国海域内にて、頻繁に海賊に襲われています。国王陛下より、我が海軍は当艦を以て、海賊討伐に従事せよとの命を賜りました。しかし、当艦は練習艦であり、また皇女MM様も乗艦しておられます。国王陛下は、皇女殿下に国王陛下の代理として、P国政府に対し、自国領海内での海賊行為の取り締まり強化を訴えと共に、当艦にて、海賊討伐を行った事実を以て、国民に国王陛下の海賊行為に対する断固たる取り締まりの意志を示すお考えです」

「成程」

「ですが、当艦やはり練習艦ですので、国から海兵隊一小隊を乗艦して来たとはいえ、まだまだ実戦不足の感が否めず…そこで、ダーリン…もとい！HG氏から、説明がありました様

に、Y海軍基地に入港した際に、殿下の護衛を承っているそこに居るEM大尉の話で、Y海軍基地近所にHG氏の経営する喫茶店とエージェント会社があるのを知り、HG氏並びに部下の方々の助けを借りようと考えました」

「…助けとな？HG殿の話とは大分違うようだが？」

「…それは…、HG氏の再会と海賊討伐にある種の光明が見えたのが嬉しくて、つい先走りして、説明をする前にP国に向けて出港してしまった次第です」

「？」

「無論、目的と報酬はHG氏に提示しました…いささか、私が浮かれて、HG氏の了解を得る前にやらかしてしまいました…」

HGは（これで、“やらかした”とよく言えるな！）とNM提督に突っ込んだ。

再びAT中佐が、HGに

「と、言う事は、HG君、NM提督の話については？それから、君自身が“密航者”として、身柄確保を願い出た事は？」

「はい、その件につきまして、まず話が前後しますが、私共を“密航者”として、海上警備省に連絡したのは、NM提督から海賊討伐の件につきまして説明を受ける前です」

「ふむ」

「海賊討伐についての説明とP国行の説明については、この艦が出航した時点で既に拒否が出来ないと感じましたが、現在ではまだオカに帰れる可能性があるので、保留します」

「…そうかね」

「そんなくダーリン」

「“ダーリン”…って、君とNM提督との関係は？」

「全くの赤の他人です！」

と、HGはキツパリと言い切った。それに対して、NM提督は、

「C国のU軍港で、二人で暑い夜を過ごしたじゃない！」

と言うと、HGはキレて

「はあ？何がでしょう…喧嘩を仲裁しようしたところに、私に拳銃を抜いたので、投げ飛ばしただけです…」

「あっ！」

「どうかしましたかAT中佐」

と、訊ねたOT殿下に、AT中佐は申し訳なさそうに、

「…思い出しました。殿下。先の大戦終結近くの事ですが、時のC国政府からの要請により、皇王陛下の御下知で、我が国の政府軍がC国内に駐屯しているN国軍を掃討するために派兵した折、B国が同盟のよしみで、我が国の海上輸送路警護を申し出て、この艦と同型艦のSTが我が国とC国の間の海域を仮装巡洋艦として、担ってくれた時期がありました。確かここに居るNM提督が、当時この艦YMの艦長として、指揮されていましたな」

「はい、その通りです」

「で、C国のU軍港の酒場で、お恥ずかしながら、B国の海軍士官ならびに水兵と我が国の海軍士官とが些細な事から喧嘩になりました、そこに我が国の政府陸軍の下士官二人が勇敢にも仲裁に入ったのですが、収拾がつかず、その下士官達が、両国の兵士を叩き伏せたと…後に『U軍港凸凹酒場騒動』と言う武勇伝になる程の騒動がありました。かく言う私も当時その酒場で飲んでいまして、騒動を観ておりました」

「そんな事があったのですね」

「で、B国の海軍士官ならびに水兵達と我が国の海軍士官達は、この二人に散々に叩き伏せられ、彼らには、喧嘩両成敗となり、憲兵隊の隊舎の査察室でお灸を据える程度で済みましたが、件の二人は、一人は、N少将を投げ飛ばし、もう一人はB国海軍士官に重傷を負わせたので、営倉入り寸前で、N少将の嘆願で仮装巡洋艦YMに乗せて、一時期YMの艦内で戦

闘に従事させたとか…その内の一人がH G君だったとは…」

「本当ですかH G殿？」

「左様です(汗)」

「そう言う、縁ですか…で、H G殿はどうされるおつもりかな？」

「はい、そう言う事ですので、まずはこの娘達を家に帰して欲しく」

と言つて、H GはX姉妹を指した。

「「パ。パー、(ワタシ)(ボク) 達も行きたい」」

と言つて、H Gに抱きついた。それを見たO T殿下は

「おや、H G殿。結婚されていたんだね。可愛い娘達だね…奥方は外国の方ですか？」
と言つて、目を細めた。

「違います。殿下、この娘達は、私の曾祖母の養女の曾孫達です」

「おやおや」

このやり取りを見ていた、L M艦長、O M大尉が悪乗りして

「「パ。パー」」

と言つて、H Gに駆け寄った。

「ええっ！」

驚くH Gと、それを見て更に驚くO T殿下とA T中佐…あと、W Y…E M大尉は苦笑いして見ていた。

「H G君…これは一体…」

「い、いえ…A T中佐。L M艦長、O M大尉は、私の子供でもありません。彼女らは、私を返したくないがために、こんな芝居を打っているのです」

とH Gが言い訳がましく言うと、N M提督がここぞとばかりに、

「こんな可愛い娘達に囲まれて…ダーリン良かったわね」

と、在らぬことを言った。それを聞いて、H Gは珍しく頭に来て、

「フイ、N M！」

と言うと、A T中佐とO T殿下は、それを聞きとがめて、

「H G君…仮にも外国の提督に対してなんて口の利き方をするんだ。それも私達の前で…不敬罪として上陸後逮捕して営倉に入れましょうか？殿下(笑)」

「そうだね…(笑)」

とニヤニヤしながら言うと、H Gは嫌そうに、

「…そんな、A T中佐。O T殿下(泣)」

「この不敬罪に対して、償って貰おう…そうだな、N M提督のP国沿岸の海賊討伐の奉仕ではどうかな？H G君」

「…」

H Gが返事をしないので、A T中佐は、駄目押しで

「どうするかね？上陸後逮捕拘留されるか、N M提督に従うか…」

と尋ねられ、H Gは観念して、

「はい、分りました(またかよ！)。しかし、この娘共は家に帰してあげてください」

と未だにH Gに抱きついていいる、X姉妹を指差した。A T中佐と、O T殿下はニツコリと笑うと、

「いいでしょう。それから、ここに居る海上保安官達と警護の海兵隊達に対して私から、一行に加わる事を命じます」

とO T殿下が言うと、

「「ええっ…」」

W YとE M大尉の二人が驚いた。E M大尉の後ろに居たE Yはこの中で(やったー！)と

ガッツポーズをとった。

：E M大尉の部下E Y伍長は、以前H G達の碇屋に実習生として居た事があり、依頼、碇屋に入る野望を持っています。作者（「巻き込まれ親父の教育」参照）

「あゝ、めんどくせー」

とH Gが叫ぶと、H Gの弟子達は（あつ、出た！）と思った。A T中佐と、O T殿下は

「H G（君）（殿）、何か言ったかね？」

「…いえ、別に…（汗）」

●新たな旅立ち…じゃなくて！

「パパー、やだー」

と騒ぐX姉妹を駆逐艦H T搭載連絡艇に押し込めると、H Gは

「お前達は、帰ってT Tの言う事を、よく聞くように…ちゃんと学校に行くんだぞ」

「やだー！わ〜ん（泣）」

「では、A T中佐お願いします」

「ウム…この子達は私が責任をもつて白山亭に送り届けよう」

「ご迷惑をおかけします…それから行ってきます」

「…頼むぞ」

「はい」

こうして、B国練習艦Y Mは目的地のP国に向けて、出航した。

練習艦Y MでのH G達の待遇は、H Gが少佐、W Tが大尉待遇、E M大尉はそのまま、それぞれ各組織の隊長は、士官室をそれぞれ与えられ、H Gの息子のA MとH Yが少尉待遇で、A MはH Gと同室で寝泊まりしていた。他の人達はそれぞれ下士官待遇として、船室を

与えられた。

P 国への船旅で、I Yが船酔いして、数日間船室で寝込んでいた…その間、H G達は、練習艦Y Mの後甲板にて、乗艦しているO M大尉配下のB 国海兵隊ならびに、戦闘要員達を鍛えた。

H Yは体術、海兵隊のE Y伍長は組手（本当は、I Yの役なのですが、船酔いが酷くて、互角の腕前のE Y伍長が担当した）、T Yは剣術、M Pは総合格闘技、A MとI Aは射撃と銃整備をそれぞれ受け持ち、それにE M大尉の海兵隊とW Yの海上保安官達がサポートに着いた。一方、H Gはそれ全体を見るのと、夜の食堂での講義を担当した。

特に、M M皇女を含む十六名の訓練兵については、H G自ら関わり、後甲板で訓練生に受け身などの基本を自ら教えていた。また、ある時は乱取りまでして、次々にかかってくる訓練生を片っ端から投げ飛ばし、受け身を取らせる訓練をした。それを見ていたH Y達、

A M「…凄いな親父、一度に十六人も相手にして…」

H Y「わたしが入社した時も、ああやってたわね…よく、畳に転がされたわ」

T Y「わたしが新入社員時代には、見た事のない風景ね」

I A「そうなんですか姐さん」

T Y「わたしの頃は、I Tさん…のちのB S A TのI T隊長が自ら格闘技を指導していたから…（巻き込まれ親父の狙撃）参照」親父は、見ていただだけの事が多かったわね」

A M「自分は、親父によく締め技で落とされました…（苦笑）」

T Y「へえ、A Mあんた親父にかまって貰ったんだ」

A M「はい、当時の自分は生意気だったので、親父に目をつけられた様で…」

I A「なんか、羨ましいです…でも、皇女様も遠慮なく投げ飛ばしていますけど…」

H Y「I A、よく見て。親父は受け身を取れる様に投げているよ」

I A「…ホントですね」

そこに、

「師匠！一手ご指導を！！」

と言つて、E Y 伍長がH Gに挑んできた。それを見たH Y達：

「あ、あの娘、以前実習に来た時に、親父と格闘技の稽古した事なかったんだっけ（「巻き込まれ親父の教育」参照）」

と、H Yが言つた

「「確かに！」」

I Aは、E Y 伍長の実力が、以前、港町署の道場でI Yと試合して引き分けているのを見ていたので、いつもI YがH Gとの練習試合では、何度もH Gに締め技に持ち込まれているの思い出し、

「いつもの様に瞬殺で締められなければいいけど…」

I Aが言ふと、E M大尉が二人の間に立ち、

「じゃ、私が審判をします。始め！」

E Yが繰り出す手数多さに、H Gは少し驚き、避けていたが、直ぐに見切り出し、E Yの繰り出す手をはじき返して、H GがE Yの襟を掴んだ瞬間、I Aは（…あ、あれでは、E Y得意の速攻投げ技でやられる！）と追う間もなく、E Yが先に倒れて、そこにすかさずH Gが締め技を決めた。

あまりの展開に、H Y達も、審判を買って出たE M大尉も訳が分からなかった。どうやら、E Yが投げようと、H Gの袖を取る瞬間にE Yの足をH Gが払ったようだった。

H Gに締め技を決められて、E YはH Gの足を叩く。H Gが締めに緩めると、E Yは咳込みながら、「参りました！師匠、ご指導ありがとうございます」と言つた。

それを見ていた周囲は感嘆の拍手をした。

●早速、お出迎え

夕方、P国T島、G海軍基地沖、練習艦Y Mブリッジ内：

「艦長、間もなくG海軍基地港のある湾入り口に近づきます」

と報告する航海士に、LM艦長は

「軍港のパイロット（水先案内人）からの連絡はまだか？」

「はい、まだです」

「…おかしいな…いつもなら、この辺りでパイロットを乗せた艇から通信が入るはずなのに…」

「どうします？」

「やな予感がする…一応、第二戦闘配置！ただ遅れただけの稀有に終わればいいんだけど」

「イエス・マム」

「両舷減速」

「イエス・マム、両舷減速！」

「全艦、第二戦闘配置！…繰り返す…」

練習艦Y M艦内、ガントリーム：

H G達碇屋エージェント、W Y達海上保安官達、E M大尉達海兵隊は、練習艦Y M艦内のガントリームで懇談していた。

「ん？減速しているな」

と、H Gが練習艦Y Mの減速に気づくと、横に居るH Yが

「准尉、P国に着いたのでしょうか？」

そこに、

『ビー！全艦、第二戦闘配置！…繰り返す…』

と艦内放送が鳴り響く。それを聞いたHGはその場に居る人達に、

「…物々しいなあ…何かあったか？総員拳銃抜いてロード（弾込め）！」

「「ハイ」」

練習艦YMブリッジ内…

「艦長、パイロットが来ませんね…」

「さて…何かあったか？通信士、G海軍基地からは？」

と、通信室への伝声管で伝えると、帰って来た答えは、

『何も言ってきましたん』

「問い合わせろ」

『イエス・マム…こちらB国練習艦YM…こちら…』

暫くして、

『艦長、G海軍基地より返信。パイロットハ、貴艦ニ向カッテイル待機セヨ』

それを聞いて、LM艦長は、

「単独入港は許可しないか…練習艦だと思って舐められてるな…パイロットが来るまで、

停船！※」

※パイロット（水先案内人）は、湾内侵入から接岸までの操艦やタグボート、岸壁の港湾職員に対する指示を一括して行います。パイロットは、入港する船に舛等で接近し、並走して飛び移るので、一々停船しません。現在入港を予定しているP国のG海軍基地付近は湾出入り口が大きく開けていて、海底も複雑な地形ではなく、潮流も穏やかで練習艦YMクラスの軍艦なら単独入港も可能ですが、練習艦YMが海外籍の軍艦であるのと、練習艦…ましてや皇女が乗り込んでるので、P国海軍が気を使っています。作者注

練習艦 Y M 艦内、ガントリーム…

「…停船しましたね」

と不安げに言う H Y に

「おかしいな…パイロットが移乗するので減速したと思ったが、停船とは…」

「どうします？」

「皆、後甲板に…多分、海賊が乗り込んできている」

「「ハイ」」

H G 達が艦内を後甲板目指して走っていると、O M 大尉が

「どうしましたか？」

「判らんが、多分、海賊が乗り込んで来ると思う…そちらも武器庫から小火器を持ち出して待機してくれ！」

「イエス・パ・パ！」

Y M 後甲板下の司令官室…

指令室の手前で、H G 達は二手に分かれた。一方は後甲板上。A M をリーダーとし、E M 大尉達…、もう一方は、H G をリーダーとして、W Y 達が続いた。

H G は司令官室のドアをノックせずに、勢いよく開けて、

「N M 提督居るか？」

「あら、ダーリン自ら訪ねて来てくれるなんて…って、ナニ拳銃抜いてんの？まさか乗っ取り？」

「違うわ！海賊が移乗している可能性があるぞ」

と H G が真剣に言うと、N M 提督は座っている執務デスクからやや後ろに首を向けて、様子を伺うと、

「…その様ね…スターンウォークに人の気配がするわね…」

と言って、執務デスクの引き出しから拳銃を取り出した。

途端に、上の甲板に銃声が鳴り響いた。

「…来るぞ！」

「はい、ダーリン」

H Gは司令官室からスターンウォークに出る防水扉のロックを外して、足で勢いよく蹴り開けた。途端に、扉の外から中の様子を伺っていたであろう海賊数人が海に投げ出された。H Gはすかさず、目の前の海賊を、ある者は至近距離から銃で撃ち、ある者は海に投げ飛ばす…パニックになる海賊をスターンウォークの反対側から回り込んできたH Y達に無力化されていた。甲板上ではA Mの指揮に従い、T Y達とE M大尉の海兵隊とW Yの海上保安官、それにO M大尉のB国海兵隊が銃撃で排除していた。

Y Mに横づけされている海賊が乗った漁船等は、O M大尉達が携帯型ロケットランチャーで次々と攻撃して沈めていった。

その後、おっとり刀でやって来た。パイロットを乗せた艇と軍警備艇。乗船して来た軍の水先案内人を問い質すと、「湾入り口に海賊が珍しくたむろしているので、怖くて船を近づける事が来ませんでした」と怯えて言った、それを聞いて、

「あなた達、それでも海軍兵？海賊を取り締まる方が海賊を怖がってどうするんですか！」と、N M提督が怒鳴った。

N M提督の怒りは収まらず。練習艦Y MがG海軍基地に無事接岸すると、舷側のタラップが岸壁に接地するや否や、自ら艦を飛び出し、G海軍基地の基地司令部に乗り込んで抗議をした。

それには、H Gも連れて行かれ、G軍港海軍基地司令部建屋の司令室でP国海軍G海軍基

地司令の大佐を前にNM提督が机をバンバン叩きながら猛抗議をしたので、HGが後ろから羽交い絞めにする事態になった。

「これは、我が国王室（B国は三軍の長を全て王族が占めているため）を通じて、P国大統領に直接抗議しますから、覚えていらっしゃい！」

「まあまあ…NM提督。落ち着いて」

●VT登場

未だに怒りが収まらないNM提督をG海軍基地から強引に連れ出したHGとWYとEM大尉は、G海軍基地傍の繁華街に繰り出した。

「P国の屋台村って、賑やかだな…」

HGが周囲を見渡しながら言うと、EM大尉も

「そうですね」

と頷く、

「適当に食べて飲むところないかね？」

「あ、そこなんてどうです？」

とWTが指差すが、HGは苦笑いして、

「…残念ながら、我々はP国語が判らん。WYさんだよりだ」

「…そうでしたね(笑)」

一軒の屋台に入るHG一行。長いテーブル席に着くと、正面に座って、もう日が暮れたと言うのに、サングラスを掛けて食事をしている女性が、

「…あら、パパ！」

と驚いて、HGに声をかけた。

「パパア？ダーリン、アタシと言う者が居ながらダーリンの浮気者！」

N M提督の冗談を無視して、H Gは

「誰だ？」

と問いかけると、女性はテーブルに乗り出し、H Gに顔を近づけて、

「私ですよ、パパ」

と言って、着けているサングラスをずらして、閉じていた左眼を開けた。そこには綺麗な金色をした眼があった。それを見たH Gは

「…VTか？（「巻き込まれ親父の隻眼」参照）」

「ハイ、パパ…なんでP国に？」

「お前さんだって、なんでここに？I国に行ったんじゃないのか？」

「それは、一ヶ月前の話…I国での任務は終わったわよ」

とVTが呆れて言った。

「それで、今度はここに？」

「はい」

と言って、ニツコリと笑うVTを見たN M提督は、H Gを突いて、

「誰？ダーリン」

と尋ねると、それをVTは怪訝そうに

『『ダーリン』って、パパの奥さん？X姉妹のお母さんにしては…大分違うようだし…』

とわざと言うと、H Gは無然として、

「違うぞ（二重の意味で）」

と言うと、VTは笑いながら、

「知ってます！」

と答えた。それを聞いてN M提督は、

「えー、そんなダーリンったらあー三十年前に暑い夜を過ごした仲なのに…」

と身悶えする様に言うが、V Tは冷たい態度で、

「あらあら、そうですか、私はV Tと言いまして、国際救護隊に勤めています。パパの娘の一人です」

「…『娘の一人』って？」

「パパには、弟子の息子娘達と、可愛い双子の実の娘（ここは、V Tの冗談）、それに私と言う娘が居ますよ」

と言うと、

「それなら、私もダーリンとの間に、娘が居るわ」

と慥然として答えるN M提督にV Tはそれを真に受けて、

「マジ！」

と驚いた。V TとN M提督のやり取りを聞いていたH Gが呆れて、

「フイ、N M提督…ここまで来て、張り合わんでくれ！」

「はあい」

H Gの言葉に、V Tは首を傾げながら、

「…て、事は、この方は？」

とN M提督を手のひらで示すと、

「彼女はB国の海軍提督…お前さんと同じく古い知り合いだが、二人の間には苦い思い出しかない」

H Gは渋い顔で言った、それを聞いたV Tは

「あら、そうなの…パパ」

と言うが、N M提督はまた身悶え居ながら、

「ん…もういけず」

と言った。

●V Tの任務

「で、パパはなんでここに居るの？」

「このN M提督からP 国の海賊討伐を頼まれた」

「海賊？」

「そうだ、ここP 国近海でB 国の商船が多数襲われているそうだ…それを討伐しろと」

「そうなんだ」

とV Tが言うと、H Gはハタと

「…そう言えば、お前さんの情報網から何か聞いていないか？」

と訊ねた。V Tは

「…ウフフ、パパったらあく私からタダで情報を得ようとするなんて、えげつないわね」

以前の事もあり（「巻き込まれ親父の隻眼」参照）、V Tは悪戯っぽく言った。

「タダとは言わんよ、それなりの礼はする…このN M提督が」

とH Gがシレつと言うと、N M提督とV Tは

「「えげつなく」」

「お礼が頂けるのなら、話すわ。P 国の海賊って、近年P 国海軍が海賊達を次々とスカウトしているから、事実上は数を減らしているわ」

とV Tが話すと、N M提督は驚いて、

「何ですって？」

と叫んだ。

「それでも、襲われているのですよね」

とE M大尉が言うと、

「そうよ」

とNM提督が言った。それを聞いて、VTは

「襲われているのは、B国の船だけですか？それとも、他所の国の船もですか？」

「…そう言われれば、我が国の船が圧倒的に多いわね」

「あと、N国とK国の船の被害は？」

「…そう言えば、非常に少ないわね…特にK国の船は、この近海での往来が一番激しいのに、海賊に襲われたと言う話をあまり聞かないわね」

「…どうして、でしょう？」

とVTがNM提督を試す様に聞くと、

「どうして、って…まさか、海賊の正体はK国？」

「…と、言いたい所ですが、実はもう一捻りありまして…」

と言つて、VTはNM提督に人差し指を立てた。

「なによ、もったいぶらないで」

不満げに言うNM提督に、VTは

「はい、この近海を航行する船舶の乗組員が関係しています」

「？」

「ここ数年、世界中を行き来している商船の類は、多くのP国籍の乗組員が運行を担っています。ま、それでP国は海で生きる人達が少なくなつて、P国海軍は海賊も雇用する様になりましたが…特に、K国は、その乗組員のかかなりの数をP国人で占めています。では、B国の船には？」

「当然、我が国は、我が国の乗組員だけ…って、まさか？」

「そう、そのまさかですよ。特にこの海域で船を運航したければ、P国人を雇いなさいと言う事です」

「そんな事って…」

「世界の海運事情では、東の大陸と西の大陸、それに南の大陸を隔てている大洋に海路を使つて最短距離で結ぶとなると、どうしてもP国領海を通らなければいけない事になります。ま、P国はそれだけ海運の要衝なのですが、小さな島が多く、その島々との間には狭くて入り組んだ水路が多く存在します。P国領海を迂回する事も出来ますが、それは余計な航行日数と燃料が必要になります。ですので、狭くて入り組んだ水路を通り、たとえ海賊に襲われても、ここを通るメリットは、はるかに大きいので、世界各国はP国領海を通ります。そのため、P国では漁業より、海賊家業が盛んなくらいです。彼らも、稼ぎたいですし…また、近年商船が大型化して狭い水路を座礁しない様に水路を安全に航行するには、P国人の航海術と水路沿岸の地元漁師達の協力が必要と言う事ですよ」

「じゃ、P国人を雇えと？」

「はい…この海域で商船を運行する時にはですけど…外国の軍艦ですら、ここを通る時は、高いお金を払っても、P国海軍の水先案内人が必要ですよね？」

「そうだけど…」

「一般の商船がP国海域を通過する時に、P国人の地元漁師なりを臨時で雇えばいいと言う事ですよ…当然、契約料は高いですが…海賊が殺される危険を度外視して通行料として積んでいる荷物を強奪するより、よっぽど平和的で効率の良い稼ぎ方をする様になったのです」

とVTが説明すると、HGは納得して、

「成程、それで解決か！」

と言うと、VTは

「…それがね。そうも簡単でもなくてね。パパ」と複雑な表情をした。

「？」

「この仕組み、作ったのはP国の海賊やP国の政府じゃなくて…」

「他国か？」

「そうなの…それも、C国反政府組織…」

とボソリと言うと、HGはゲンナリして、

「また、あいつらかよ」

「そうなのよ…パパ嫌いだものね」

「そうだよ」

「でも、聞いて頂戴！C国反政府組織は、この海域を航行する民間の船にP国人の乗員を乗せて、積み荷の情報を調べて、連中が必要な物資を載せている船を襲っているの」

「「ナニ！」」

「B国の船が襲われる理由の一つは、積み荷が判らないから、取り合えず襲うのと、もう一つは、B国の船って、希少鉱物とか南半球で捕れる食料等が多いからなの」

「じゃ、P国人の乗員を雇っても、被害はあまり変わらんと言う事か」

「そうなの…だから、私の任務は、今P国の海賊の統括をしているC国反政府組織の幹部の一人…「緋扇の軍師」と言うんだけど、彼女を始末する事」

「…彼女？もしかして…」

HGはVTの話に、一ヶ月前の事を思い出した（「巻き込まれ親父の隻眼」参照）。

「ええ、女性幹部よ。パパ知ってるの？」

「知ってるも、何も…あの「隻眼の魔女」を使って、L国国王暗殺を現場指揮していたのが、
「緋扇の軍師」ってコードネームで、そいつはGYって言う女なんだが…始末って、暗殺か？」

と言うHGに、VTは大層驚き、

「エッ？あの「隻眼の魔女」…IEさん（「隻眼の魔女」の本名）の指揮官だったの？「緋

扇の軍師” って…そうね、最悪暗殺する事になるけど…今、本部の工作が功を奏して、彼女は組織を裏切ろうとしているの…だけど、”緋扇の軍師”のコードネームの様に、したたかで…」

「そうだな…作戦とあの引き際の良さは」

「いま、別のチームが彼女を確保に動いているの。私は、それが失敗した時の対処要員」

「それが、成功すると？」

「ま、海賊行為が激減すると思うわ。P国人をこの海域で雇うのは無くならないけど…だから、パパ協力してね」

「ダーリン、娘からおねだりされたわね…私の仕事の依頼も同じだから、協力しましょ」と利害が一致したので、NM提督はホクホク顔で言った。

●アジトを探すには、現地の人の協力が必要

「…だとすると、この国のC国反政府組織のアジトを探さないと…VT、宛てがあるのか？」

「…いえ、全然」

「GYの確保に動いているんだろ？だったら…」

「それがね…連絡はいつも一方的で、指定された場所に行っても、GY本人に会えなくて…だから、GYの顔もよく判らなくて…」

「GYの写真ならあるぞ」

「エッ？嘘！」

「こいつがGYだ」

と言って、HGはスマートフォンを取り出し、GYの画像を表示した。VTはそれを覗き込んで、

「いつ、撮影したの？」

「…先月。お前さんが店に来る前に、C国ドレス着て店に来た時の店内の監視カメラの画像…その後にC国の政府関係者(RRの事。HGの方便)から、GYの手配書を見せて貰って、GYが“緋扇の軍師”本人と確認した」

「パ。パ…GYと対峙したの？」

「対峙したも何も…GYは俺がN国国境付近の戦線に居た頃のC国参謀本部から派遣された軍監だし…それにお前さんを救出した一行にもいたし…」

「嘘！」

VTはHGの言葉に思わず口を手で覆った。

「ま、お前さん、俺にくつついて離れなかったからなあ…GYが居たので、あの深い霧の中を無事帰る事が出来たようなものだし、お前さんを国際救護隊に引き渡す事がすんなり出来たのも、GYが手配してくれたおかげだ」

「…そうだったの。私達奇妙な縁なのね」

「そうだな、GYが当時所属していたC国政府軍参謀本部は、政権が交代すると、そっくりC国反政府組織に取り込まれたそうだから、彼女もその流れで組織に入ったのだろう」

と、HGとVTが昔の事をしみじみ語っていると、NM提督が水を差すように、

「…ダーリン、そんな事が…で、アジトはどう探すの？」

「うゝん…」

とHGは考え込み。

「…一つ、考えがあるが」

と言って、HGはスマートフォンを取り出すと

「海外ローミング使いたくないんだけど…料金高いから」

と言いながら、ある電話番号に掛けた

『はい、PEです』

「H Gです。お久しぶりです」

『まあ、H Gさん。お久しぶりです。お元気ですか？』

「まあ、元気にやっています」

と言う会話に、W Yが驚き

「P Eさんって、あのP 国の富豪の娘さん？」

「そうだよ」

「彼女、何時皇国語を？」

「あつ、それはスマートフォンのA I翻訳…」

「あ、成程」

『H Gさん、どうしました？』

「あ、いや傍にW Yさんが居るので」

『あら、W Yさんも？じゃ、あの海岸に海水浴に？（巻き込まれ親父の納涼」参照）』

「…それが、今、P 国のG 海軍基地の傍に居て」

『ご旅行ですか？』

「チョット違いますね（笑）」

『会いたいわ…P 国のG 海軍基地なら、車ですぐの距離ですし』

「…そうなの？」

『はい、T 島のG 海軍基地ですよ。私の家は、T 島にありますから』

それを聞いて、H Gは、以前彼女の父親から経営する農園の作物を卸してくれる申し出があり、R Rを交えて話をした時に、貰った名刺に書かれていた住所を思い出した。

「あ、確かに…ま、今日は遅いから、明日にでも」

『はい』

翌朝、G海軍基地ゲート前：

「HGさん」

赤いリムジンを降りたPE嬢がHGに走り寄った。

「お久しぶりです。相変わらずお元気そうで」

HGの手を握って言うPE嬢が皇国語を話したので、HGは驚き、

「あれ？皇国語話せるんだ」

「はい、あれから皇国のHGさんのお店に行ったり、取引したりするのを夢見て必死で勉強しました」

「ハハ：WYさんの通訳、要らなくなったな」

と隣に居るWYに語り掛けると、WYは

「アハハ：（苦笑）」

PE嬢は、今度はWYの手を握り、

「WYさんもお久しぶりです」

「ほんと、お久しぶりです」

その光景を見たNM提督は、

「ダーリン、この人は？」

と尋ねると、HGはPE嬢を招き、

「P国の大農園経営者のお嬢様」

と、紹介した。

「PEと申します。E農園の経営者の娘です」

と自己紹介をして、NM提督は不思議そうに、

「その人に何を」

「ここじゃ、何だから、あそこのカフェで」

「はい」

カフェ店内：

「早速で済まないけど、教えて貰いたい事があって」

「はい、何でしょう？」

「P国内でのC国資本のホテルとリゾート開発地の場所を知りたいんだ…あと、開発と経営をする会社の名と住所も」

「あ、そういう事ですね。お安い御用ですよ」

H GとP E嬢の会話を横で聞いていたV TがH Gに

「パパ、どういう事？」

と聞いてきた。

「近年、P国では海外資本のリゾート開発が多くて、特にC国資本のリゾート開発は跳びぬけている。その中にC国反政府組織がバックについている経営母体が判れば、その内のどれかが多分アジトなので、かなり絞り込める」

とH Gが説明すると、V Tは

「そう言う事ね」

と言って、納得した。V TがH Gの事を「パパ」と言ったので、P E嬢は不思議そうに

「あら、娘さんですか？」

「はい、パパの娘の一人です」

とV Tが嬉しそうに言うと、P E嬢は、

「あら、娘さんって…あのビーチに居た女の子じゃなくて？あの子達は、もっと小さくて、皇国の人だったけど」

と、数年前、自身が誘拐され、K国の貨物船に閉じ込められて、N国に向かう途中に貨物船

がY国際港に立ち寄った折、見張りの隙を突いて海に飛び込み、Y国際港とY海軍基地を隔てている岬の突端の浜辺にたどり着き、たまたま海水浴で来たHG達一行と出会った時の事を思い出していた。

「ああ、あの子達はウチの従業員の子供だよ」

「そうだったんですね。で、奥様は」

「あたしヨ」

と言つて、NM提督は自身を指差した。それをHGは、

「フイ！NM提督。悪乗りしない」

●情報提供

「じゃあ、私は一旦家に帰って、HGさんの宿題を済ませてきますね」

「あと、ついでにお父さんの紹介状を貰えないかな？」

「何故ですか？」

「開発を行っている会社と話するのに、ただの皇国の喫茶店のオーナー…と言うのは」

「あ、そういう事なら私が書きますよ」

「？」

「私、今、父の片腕として経営に携わっていて、農園の取締役なので…」

「それは、ありがたい。是非に」

「じゃ、私の親戚のコーヒー農園の経営者…GEさんとしてもおきますね」

「ありがとう」

その日の午後、PE嬢から呼び出しがあり、再びG海軍基地傍のカフェに入った。

「これが、HGさんの宿題。それから、こっちが私からの紹介状」

「ありがとうね」

「これで、何をするのですか？私も知る権利がありますよ」

「そうだね…隣に居るNM提督はB国海軍提督だね」

「？」

「彼女の国の商船がこのP国海域で度々海賊に襲われて困っているそうだ」

「あら」

「それで、海賊討伐を頼まれたんだけど…海賊を組織して襲わせているのが、C国の反政府組織…と言うのが、そこに座っている俺の娘…と言っているが、彼女…国際救護隊の職員からもたらされた。彼女も、C国反政府組織の幹部の拘束を計画しているので、共同戦線を張っている。それで、C国反政府組織のアジトを探して、幹部に接触するために、君にP国内でのC国資本のホテルとリゾート開発地の位置と、その会社の住所を調べて貰ったんだ」と、VTの任務に暗殺が含まれていることを敢えて言わずに、HGは話した。

「成程、そう言う事ですか、最近海外資本のリゾート開発が多くて…結果観光客は増えて観光収入は好調ですが、それに伴い、最近では過剰開発で自然が破壊されて問題になっています。特に、C国資本のリゾート開発は、酷くて…私の父や親戚の農園にも買収の話が…それもあり強引なやり口で…それが止められるなら、いくらでも協力しますよ」

「ありがとう（あれ？PEさんの誘拐事件もそれならみかな？）」

「ごめんなさいね。我が国のゴタゴタに付き合わせて…」

と珍しく愁傷にしているNM提督に、PE嬢は

「いえ、我が国もこれ以上の自然破壊は何としても止めないと」

と言うと、HGは

「…これで、俺にも何か見返りがあれば『三方良し』なんだが…」

とボソリと言うと、そこに居た全員、

「「えげつな〜」」

●ここからは、R Rの出版

P E嬢と別れて、H Gは練習艦Y Mの艦内に戻り、P E嬢から貰った資料をR R宛てにメール送信した後で、R Rに電話すると、いきなり

『おう、H Gか…ワイ、H G！店は大変な事になってんぞ！』

「エッ、マジ？」

『T Tさんが、ウチに来てLに泣き言を言ってる。准尉が海外に娘達と拉致された〜(泣)』
って』

「アハハ…(汗)」

『お前の事は、Y海軍基地からA T中佐って、お偉いさんが、お前の隠し子達を送り届けてくれて、その後B侯爵が来店して、S Kと俺まで呼び出して店内で詳細を説明してくれた…それでもT Tさん情緒不安定になっているぞ』

「じゃ、店は？」

『昼間は、X姉妹が切り盛りしている…あの隠し子達凄いな！T Tさんからコーヒーの淹れ方を学んで、すっかりモノにしている。俺が試しに飲んだら、しっかり味わいのクオリティーを保っている…基本、B Xがバーカウンターでコーヒー淹れて、A Xが接客して、ついでに現状役に立って居ないT Tさんの代わりにアルバイトを纏めている。Kお嬢様も二人を手伝ってる…夜は、しっかりI Iがやってるし…お前、要らんぞ！』

「ナニー」

『だから、海外社員旅行で遠慮なく羽伸ばしていいぞ！(笑)』

と、R Rが冗談を言うと、H Gは

「ちがう！」

『で、なんだ？』

「あ、そうだ。実は今、P国で海賊討伐しているのはB侯爵様から聞いたよな？」

『嗚呼…』

「で、現地に行って新たな情報を得た」

『？』

「P国の海賊を組織して、商船を襲わしている黒幕はC国反政府組織…」

『何だと！』

「それも、指揮しているのは“緋扇の軍師”こと、GYだと言う事が判明した」

『…成程ね、あいつらが関係しているので俺にわざわざ…料金の高い海外ローミングサービス使ってまで電話掛けてくるんだ』

「そうだよ…なので、長電話出来ない」

『…んな事言って、長電話させてんの、お前じゃないか！』

「…アハハ」

『で、俺は何をすればいい？』

「今メールしたP国内でのC国資本のホテルとリゾート開発地の位置と、その会社の住所から、あいつらのアジトが割り出せないかと思ってね」

『なぐる。解った。任せろ』

「頼む」

その晩、RRからメールが送られてきた。HGはメールに添付されて来たファイルを見て、
「これが、C国反政府組織が母体として経営しているリゾート会社か…T島のホテルKH
…C国企業の経営か、その一室に事務所構えているのか」

● G Y v s H G

ホテル K H、ラウンジ：

H G はふらりと、高級ホテル K H のロビーに入る。すかさずホテルのボーイが近寄り、

「いらっしやいませ、当ホテル K H によるこそ。お泊りですか？」

「いや、ここに C 国国際リゾート開発公社の取締役 G Y さんという方が事務所を構えていると聞いたもので：あ、私、P コーヒー農園経営者の G E と申しまして、親戚の E 農園の社長さんの娘さんから紹介されて来ました。紹介状はこれに」

と言って、H G は P E 嬢から渡された紹介状をボーイに渡した。ボーイはそれを受け取ると、
「そうですか：お客様をお呼びして参ります」

「はい、ありがとうございます。これを：」

と言って、H G はボーイにチップを渡した。

ボーイの案内で、ラウンジの一角に通される。

「ここで、お待ちください。お飲み物は？」

「コーヒーを頂きましょう」

「畏まりました。お待ちください」

暫くして、“緋扇の軍師”こと、G Y がボーイに案内され一人でラウンジにやって来た。

それを見た H G は、陽気に手を挙げて、

「よ、G Y さん」

と声を掛けると、G Y は H G を見て驚いた。

「：エッ、H G さん？」

「そうだよ、先月は当店にご来店いただき、ありがとうございます」

驚く G Y に H G はニコニコしながら言うと、G Y の目つきが鋭くなり、

「ここには？」

「コーヒ―豆の仕入れ先の一つがこの国でね…そのコーヒ―農園の経営者に招待されて来た」

などと、H GはG Yにここに来た目的はとうに知られていると踏んで、紹介状の内容を無視して話した。それをG Yは怪訝そうに見ながら、H Gの向かいの席に座ると、澄まして、

「あら、そうなの。よく、私がここに居るのが分かりましたね」

「それは…俺の独自の情報網から…それに、その手に持っている緋色の扇…遠くからでも目立つ」

「そうね…これは私のトレードマーク…だから“緋扇の軍師”と呼ばれているわ。目撃情報でも集めたのかしら？」

「ほう、自らその名を明かすとは。俺がここに居る目的はお見通しと言うわけだ」

と、相変わらずニヤケて言うH Gに、G Yは、

「そうよ、B国海軍の手先なんて…あなたらしくないわ」

と憐れむように言った。H GもG Yの言葉に同感で、

「なんだ、バレてたか…そうなんだよなあ、俺も望んで手先になった訳じゃないよね
」

とH Gがゲンナリして言うと、G Yは意外そうに驚き、

「そうなの？」

「B国の海軍提督に騙され、拉致されてここに連れてこられた…」

「なにそれ？(薄笑)」

「帰りたいければ、海賊討伐しろ…って」

「あら、それは災難ね…でも、それだけ能力があると見込まれたんでしょ」

「そんな見込まれなんかいない、ただあの町で食べていければ…」

とHGが言うと、GYは呆れて、

「何を謙虚な事を…、私知っているわよ。あなたY国際港であの白山亭の他に裏で碇屋というエージェント会社をやっているのを」

「いや、別に陰とか裏とかの経営じゃないんだけど(汗)」

「あら、碇屋も表経営？」

「そうだよ、碇屋は元々ガンスミスの会社だ。表に看板出してないだけだ。ただ知っていると
思うが、弟子共が押しかけてきて、それだけでは食べていけないから、弟子共使ってエージェント部門を設けた」

と言うと、GYは手に持っている緋色の扇を口に当てて、

「あら…私の勘違いね。白山亭と碇屋をモデルにした喫茶店を帝都の電気街に作り、アニメまで作成したのに…」

と言うと、HGも

「あの、『ゴスロリ喫茶梁山亭』と、アニメの『ゴスロリ★エンジェル』の事ね。アニメは面白かったよ。ウチの娘共も夢中で見ていた。やはり、あの設定はウチをベースとしたんだ…でも、ウチは殺し屋稼業でもないし、白山亭の女給服はゴシックロータ服ではなく、メイド服ベースのオリジナル制服だし、娘共は女給服着てエージェントの仕事しないぞ」

と言うと、GYはムツとして、

「…突っ込みありがとう、オリジナリティーと言って欲しいわ。それに、過去にY国際港のフェリー埠頭で、女給服でエージェントの仕事したじゃない(「巻き込まれ親父の突入」参照)」

と反論した。

「うっ…それを言われると…結構ウチの事調べてるな」

「そりや、そうよ、散々ウチの組織痛めつけてくれて(怒)」

とGYが苦情を言うと、HGは遺憾に感じて、

「言っとくけどな、何も目の敵にして、相手にしている訳じゃないぞ。たまたまウチの依頼主の相手に、オタクの組織が絡んでいただけだ」

と反論すると、GYは席にふんぞり返り、両手を広げて、

「手広く商売していると言ってほしいわね薄笑ゝで、今度も依頼主様の相手がたまたまウチの組織と言う訳？」

と言って、姿勢を前傾にして、下から、HGを睨むように言った。HGはGYの視線に怯む事無く、

「そうだよ、P国の海賊討伐のはずが、裏で糸引いてるのが、あんたらの組織だったてえ事だゝゝ愁傷様」

とHGが言うと、GYはゲンナリして俯くと、HGに持っていた緋色の扇を突き出して、
「ホント、ご愁傷様だわゝあんたが出てきたら、この作戦潰されるの目に見えてるから」

と怒りを露わにした。HGは臆することなく、

「それだけじゃないだろ？」

と、言って、GYが前かがみになったタイミングを捉え、HGはテーブルに身を乗り出すと、GYの耳元で

「(そろそろ、組織から足を洗いたいんだろ?)」

と、囁き、GYに揺さ振りをかけると、GYは狼狽えて、

「(ど、どうして…それを)」

「(お互いこの歳だ、同じ事考えてると思ってね)」

「(それだけじゃ、ないでしょ)」

「(…バレたか！実は、国際救護隊の裏工作の情報も知ってるぞ)」
と言うと、HGは席に座った。GYは呆れて、

「ホントにえげつないのね！『緋扇の軍師』のコードネーム返上したくなるわ」

と、履いて捨てる様に言うと、HGはニヤリと笑って、

「元々そのつもりだろ？だから、それに乗ったのも、俺の目の前に姿を現したのも」と言うと、GYは観念して、

「ハイハイ、お見事な見識：参りました。で、私をどうする気？」

「連中は、この計画を潰して、お前さんを捕まえるか、最悪殺すつもりらしい…」

「あらそうなの？で、私を上回るアナタの考えは？」

「俺はあんた程の才能を、このまま埋もれさせたくないな。ましてや殺されるなんて」

「あら、ありがとう。素直に喜ぶわ」

「だったら、死んでくれ！」

とHGがシレっというと、途端にGYは慌てて

「…な、今死んでほしくないって言ったじゃないの！」

「そうだよ、だから今すぐでもなくていいから、死んでくれ」

「は～ん、成程ね…国際救護隊かB国の海兵隊に撃たれると…」

「そうだよ、はいこれあげる」

「…なに、爆弾のプレゼント？」

「う～ん、それに近いかな」

「開けていいの？」

と袋に手をかけながら上目遣いで尋ねた。

「大丈夫、破裂しないから」

GYは恐る恐る袋を開けると

「どっかーん！」

とHGが言った。GYは笑って

「やだー脅かさないでよ」

G Yは中身を確認すると、

「…なにこれ？インナー？もっと気の利いたのなかったの？指輪とか、金か真珠のネックレスとか…」

「今、お前さんが一番必要とするものだよ。D国製の最新防弾インナー…あと血糊」

「血糊？」

「そう…、その貧相な胸元にあるバラの刺繍の下にでも入れてくれ」

と、H GはG Yの着ているC国ドレスの左胸にある薔薇の刺繍を指差して言った。それを聞いた、G Yはムツとして、

「…酷い事言うわね…セクハラよ(怒)」

「いいじゃん、格好の的だから…それに死ぬんだろ？」

「煩いわね」

「死ぬ前に教えてくれ」

「なによ、さつきから死ぬ死ぬって…殺す気ない癖に！」

「でも、世間体は死んだことにしないとね」

「…あら、そう…で、ナニ？」

「組織を抜ける理由…」

「いいわよ。私の遺言に聞かせてあげる。私もいい加減歳だし…あの組織に先はないし…あんたみたいのが散々邪魔してくるし…それに、色々知りすぎたし…おかげで、恋もできなかったわ…あんたもでしょ？息子娘は多いけど、実の子供じゃないし…私も良い旦那様と結婚して二人の間の子供が欲しかったわ」

「そりゃ、同情するね。特にお前さんの歳で未婚の女性はそう思っている人が居るね…ま、あくまで身近なサンプルだけだ」

「そうね…」

「中には、若い頃病気で子宮を取った人も居て、その人から子供が欲しかったなんて言われると、どう返していいものか、まだ答えが出てこない」

「ま、私は在っても、今では役に立たないけど…」

「スマンな、気の利いた言葉をかけてあげられなくて」

「…うん」

と、GYは悲しそうに首を振った。その後、少し話をして、HGは、

「じゃ、明日。ここで」

「分かったわ。あっさり殺してね」

「分かった」

GYは部屋に戻り、HGから渡された防弾インナーを袋から取り出と、中から手紙が入っていた。GYはそれを見て

「明日の、作戦の指示か…」

と一通り、頭に入れると、手紙を燃やしてその火で葉巻に火をつけた。

●VTの将来像と、TYへのアドバイス

VTは、HG達と合流し、NM提督の斡旋もあり、練習艦YM艦内に居た。突然のVTの登場にHY達碇屋エージェント達は、驚くが、迎い入れた。

VTはHG達の他に皇国の海兵隊一分隊、海上警備庁の保安官一分隊がYMに乗艦している事に驚いた。

VTが相も変わらず、自己紹介の場で

「私は、VTと言いまして、国際救護隊に勤めています。HGさんとは古い知り合いで、H

G。パパの娘の一人です」

と言ったので、既にHGとVT事を知っているEM大尉とWYは苦笑いするが、EY伍長は『HG。パパの娘の一人〳HGの弟子の一人』と解釈して悔しがった。

練習艦YM艦内ガントリーム…

ガントリームのテーブルで、TYは一人お酒を飲みながら、考え込んでいる時に、VTが現れた。

「あ、VTさん。呼び出してゴメンナサイ」

とTYがすまなそうに言うと、VTは、TYとテーブルを挟んだ席に座り、

「あら、TYさん…お互い歳が近いから、〴〵さん〴〵付もないわね」

VTはニツコリと笑って言った。TYは頷きながら、

「そうね」

と返事をする、VTはTYに対して、

「で、ナニ？」

「VTは、このまま国際救護隊のトラブル対応部門としていつまで働く予定？」

と話を切りだした。

「なんで、そんな事聞くの」

「…いや、いま実家から見合いの話が来ていて…それをHY姉さん達に話したら、ここらがターニングポイントだって…」

と、言ってTYは自分の悩みを打ち明けると、VTはTYが困っているようなので、VTはTYの話に共感して、

「そうかもね…TYはこれからもエージェントを続けるか、結婚してエージェントを辞めるかで迷ってるんだ」

と、TYの話そうとしている事を言うと、TYは

「そうなの：相手が、わたしがエージェントをもう少し続けるのを理解してくれるかどうか不安で」

「そっか…」

「で、VTはどうなの？」

「私は、今この国で行っている任務が終わったら、転属する予定…」

「転属って？」

「ウチの組織は、所属職員のキャリアについて、都度話し合うのと、モデルケースがあるから：上司とキャリアアカウンセラーを交えて話し合いをするの、モデルケースでは三十代は、現場をぼちぼち離れて、裏方に回るのよ：その過程で多く女性は結婚して子供を産むので、産休育休に入るわ。私は、現場が面白かったのと、仕事で皇国に行って、パパを探すために現場に留まっていたけど、パパも見つかったし、この任務が終わったら、皇国支部に転属願いを出しているわ」

「…そうなの？」

「私の所属はS国の本部だから、支部に転属するためには、かなりの実績を積まないといけないけど、転属願いが受領されるまで、今まで頑張ってきたのよ。多分任務が終わってP国の支部に立ち寄ったら、その場で皇国支部への転属の辞令が待っていると思うわ」

「へえ、で、皇国に転属したら？」

「それは、勿論パパや皆に会いに行くわ」

「…いや、結婚とか…」

「うーん、そうね、ご縁があったらかな？私は、人よりハードルが高いから…」

「ハードル？」

TYが疑問に思っただけだと、VTはサングラス越しに自分の左眼を指して、

「そうよ、この眼！生まれてくる子供には滅多に遺伝しないそうだけど、私の生まれた村では、結構オッドアイの人が、各世代毎に出たそうだから…それに、私が母親だと、子供が虐めにあつたりするしね」

「そこまで、考えているんだ」

「そうよ…そうしないと、家族が平穏に暮らせないでしょ」

「…そうですね…それに比べれば、わたしの迷いなんて…」

「そんな事ないわよ。まだ貴女もパパの役に立ちたい、それから、弟子のIAを鍛えたいって気持ちがあるでしょ。だったら、その見合いの場でお相手に直接聞いてみたらどう？」

「…そうね…、相手に直接聞いてから答えを出してもいいのか…」

とTYが前向きになって来たところに、

「あゝら、そんなに悩む事ないわよ」

TYが驚いて声の主の方に振り返ると、そこにWYが居た。

「…WYさん！」

「ウチの弟は、あなたの仕事について、理解しているわよ。大丈夫…だから、遠慮なく言つてね」

「あら、TYのお見合いの相手って…」

「そ、私の弟」

「そうなんだ…だったら、尚の事ね」

「そうね」

● 作戦会議

夕方、HGは練習艦YMのブリーフィングルームに関係者を集めた。

「あゝ、昼間、C国反政府組織の幹部の“緋扇の軍師”に逢つて来た」

「『ええー？』」

「で、パパ。彼女は何と？」

「彼女は組織を抜けたがっている。しかし、組織の幹部だし内情を知りすぎたんで、抜けれない」

「でしょうね」

「…なので、死んでもらう事にした」

「『&』」

「…それって、本当じゃないわね(薄笑)」

「流石、V T。良く解ってる」

「そりゃ、この仕事をしていると、死んだことにするなんて、たまにあるから」

「『そく言う事？』」

H GとV Tの会話から、その場に居た人は納得した。

「で、まず裏工作として、彼女にD国製の防弾インナーと血糊を渡してきた」

「いつの間に！」

「血糊は、トレードマークのC国ドレスの左胸の薔薇の刺繍の下に仕込むように指示して来た。そうする事により、彼女の貧相な胸の下にある心臓が狙いやすくなる」

「…パパ…その言葉、今では国際問題よ(怒)」

とV TがH Gを諫める様に言うと、N M提督は、自分の胸を強調しながら、

「ダーリン、私の胸は豊満よ」

「…V T、こういう発言はいいのか？」

「別に本人が言うには…(汗)」

「で、明日彼女は配下数人を連れて、また俺と逢うので、V Tは、彼女のその…胸元の薔薇の刺繍を撃ってくれ」

「はい、パパ(苦笑)」

「それにより、『緋扇の軍師』は、射殺されて、この世から抹消される。それを見たC国反政府組織の手下共を一挙に制圧し、拘束して、P国側の海賊組織を吐かせて殲滅する」

「「ハイ」」

「なので、NM提督には、P国政府…特にT島の警察に対する対処をお願い」

「はあゝい、ダーリン」

「…では、隊分けを行う。EM大尉は、そのまま海兵隊を率いて下さい」

「はい」

「OM大尉も、自国の海兵隊を率いて下さい。なおAMをつけます」

「「ハイ！」」

「WYさんは、海上保安官を率いて下さい。なお、TYをつけます」

「「はい」」

「VT」

「はいパパ」

「お前さんはスナイパーとして配置…と、言ってもお前さんの組織の建前上、そちらの裏工作が失敗した事にしないとな」

「そうね…」

「なので、俺がGY達に銃を抜かせるから、お前さんはそれを阻止するためにGYを撃つ…てえのは」

「成程。じゃ、私は配置場所にウチ(国際救護隊)の職員を連れて行けばいいの?」

「そうだね。『緋扇の軍師』のアジトを見つけた。明日、B国海軍代理の者が、P国領海

内を航行するB国商船に対して、海賊行為をしない様に交渉するとの情報を得た。その席に『緋扇の軍師』が出席すると思われるので、確認に来て欲しい』とでも言っておいてくれ…ま、居るけど」

「それで、ウチの職員の前で、私が撃つのね」

「そうだよ。じゃないと、お前さんの立場も危うくなる…いくら別動隊とは言え、ここで我々と癒着しているのがバレたら大変だろ？」

「パ・パ…そこまで考えて…って、えげつないわね」

「ハハ(笑)」

「なお、H YとI Y、お前さん達もスナイパー。相手はG Yではなくて、G Yの手下達」

「「はい」」

「M PとI Aは俺の直接指揮下に入る」

「はい」「ハイネ」

「あゝ、I Aいいなあゝ」

と、H Yが羨ましがった。

「各配置は、ここに…間違っても、俺を撃つんじゃないぞ」

「「ハハハ」」

「では、方々ぬかりなきよう…」

と、H Gが言うと、H Gの弟子達は(またかよ！本当に時代劇が好きだなー)と心の中で突っ込んだ。

●大芝居？

『こちら、V T。配置にきました』

『こちら、H Y・I Y。配置にきました』

『こちらE M隊。配置にきました』

『こちらO M隊。配置にきました』

『こちらW Y隊。配置にきました』

と、次々と配置完了の連絡が入る。

「さてと… I A、M Pこちらも始めるぞ」

「ハイ」「ハイネ」

H GはI AとM Pを連れて、高級ホテルK Hのロビーに入る。すかさず昨日のホテルのボーイが近寄り、

「P コーヒー農園の取締役のP G様ですね。お客様がラウンジでお待ちです」

「はい、ありがとうございます…後ろに居るのは、秘書とボディーガードです。これを…」

と言って、H Gはボーイにチップを渡した。

ボーイの案内で、ラウンジの一角に通される。そこにはG Yと部下三人が居た。

「P Gさん、昨日はどうも…素敵なプレゼントありがとうございます…」

「それは、どうも…気に入られたようで…で、今日は、正式な商談で参りました。こちらは、私の秘書I AとボディーガードのM Pです」

「そうですね、私も部下を同席させますわ」

「…では、早速…あ、I A君地図を」

「あ、ハイ」

I Aが持っている鞆を開けて、地図を取り出した。H Gは地図を受け取ると、それをテーブルの上に広げて、

「…で、このエリアを御社は開発したいと？」

と、あらかじめ、ペンで地図上のある場所を丸で囲っている場所を示すと、G Yは、それを覗き込んで、

「ええ、このエリアは開発すれば、海が見える絶好のロケーションで、いいホテルが立ちますわ」

と期待を込めて返事をする、H Gは困り顔で、

「しかし、このエリアのコーヒーは、極上の豆が採れ、土地に居るジャコウネコが食べたコーヒー果実の糞から希少価値のコーヒー豆が採れる場所です。このコーヒー豆は、我が農園の重大な収入源であり、また世界的にも希少なコーヒー豆を収穫する機会を永遠に失うのは…国際的に大きな損失になります」

と言つて、手のひらを上に向けて、言ふと、G Yは怒つて、

「…成程ね、ではアナタの農園は、世界的な価値があるから、もっと値段を上げたいと？」

「いえ、お金云々ではなく、世界的な損失を憂いているのです」

「…これでは、交渉になりませんね。オイ！」

とG Yが言つて、手を挙げて指を鳴らすと、G Yの後ろに居る部下達が拳銃を抜いてH G達に向けた。I Aはすっかり怯えて、H Gにしがみついた。M Pは懐にある拳銃に手をかけるが、H Gに手で制される。

「おや、脅しですか？あなたらしくない…そんなモノ向けられて、ここで殺されても私は農園を手放しませんよ」

とH Gが虚勢を張りながら言ふと、G Yは薄笑いをして、

「威勢のいい事で…ここであなただを殺して、その鞆にある利権書を奪う事は容易いですよ。

ここは、お互い血を見ることなく、取引できませんか？」

「…私の答えは、これです」

と言って、H Gは、胸ポケットに挿してあるパイプを取り出し、咥えると、テーブルの上にある喫煙セットのライターを手に取り、火をつけた。途端に、G Yの着ているC国ドレスの左胸の薔薇の刺繍が弾け飛びそこから血飛沫が上がった。

何があったか、判らないG Yは、自分の胸元を見て、テーブルに突っ伏した。次の瞬間、I AとM Pがそれぞれ懐の拳銃を抜いて、G Yの後ろの部下の拳銃を打ち落とした。それをすかさず、正面から突入して来たW Y隊に拘束される。同時にO M隊がホテル内に展開し、そこに居たC国反政府組織の構成員を次々と捕らえ、またG Yの事務所に押し入り、そこに居た人達を拘束した。一方、裏口は、E M隊が取り囲んでいた。

●終焉…(笑)

H Gは自分にしがみついたまま拳銃を撃ったI Aに

「よくやったな。最初俺にしがみついた時、本気で怯えてると思ったが」

「…いえ、実は怖かったですう」

「そうか…M Pもよくやった」

「ハイ、シャチョー」

そこに、V TとH Y、I Yが駆け込んできた。

「パパ!」「准尉!」

「三人供、よくやってきたな」

「「はい」」

「で、撃ったのは?」

「私よ、パパ」

「そうか、V Tか、じゃ国際救護隊のメンバーは?」

「はい、見ていました」

「で、その人達は？」

「『緋扇の軍師』ことGYは、パパ達がGYの部下達に殺害されるのを、阻止するために、私がやむを得ず射殺したと認識して、残りのC国反政府組織の構成員達は、ロビーにOM大尉とWYさんの隊が雪崩れ込んだので、B国海軍に拘束されたと認識して引き上げました」

「…そうか、何とかなったか」

「はい、パパ」

その時、GYが意識を取り戻し、VTの姿を見て、

「私の娘…『隻眼の魔女』を殺った…まさか、貴女に撃たれるとはね…VTさん」

「私の事を知っているのですか？」

「それは、もう…あなたの事もHG曹長の事も…」

「？」

「覚えてない？N国との泥炭地での戦線…あなたが、HG曹長に背負われて、N国領から救出された時、一緒に居たのよ。私は」

「…エッ？私の生まれた村にですか？（既にパパから聞いているけど…知らないふり…）」

「そうよ…私もあなた達の一行の中に居たの…私は当時のC国政府から皇国政府軍に派遣された軍監の一人としてね…あの霧の夜のN国軍の夜襲を盛り返して、闇雲に突撃して、挙句に道に迷って、あの廃村を見つけたら、HG曹長が宣教師と話をしているのを見て…それから、貴女を連れて、C国領に村人達と霧の中を向かったのよ…途中で、あなたHG曹長の背中では私に対して、食べ物や飲み物を何度もねだって…『ママ、お腹空いた。食べ物頂戴』って…あれから、大きくなったわね。そして美くなりましたね。VT」

「…それじゃ、GYさん…いえ、ママ！」

と言って、VTはGYの手を取った。GYは薄目に涙を浮かべながら、

「ママと呼んでくれるのね…ガフツ！」

「ママ、しっかりして！」

「VT…さよなら…」

と言って、GYは瞑目した。

それを見て、HGは呆れて、

「な〜にが、『VT…さよなら…』だ、二人供、三文芝居はそれまで！それに、VTお前さんも悪乗りして…」

「「え〜、折角いい所だったのに〜親父のいけず！」」

「「こらこら、娘共、もらい泣きしてるんじゃない！」」

と、HGが言う後ろで、AMが苦笑いしていた。

「でも、パパ。私、GYさんを“ママ”と呼んでいたのは忘れてたわよ」

とVTが言うと、GYは

「あら、そうなの。それは残念だわ…イタタ」

と言いながら、GYが血糊の付いた胸を抑えて体を起こすと、VTが心配して介助した。

「大丈夫ですか？」

「そりや、七・八ミリのマグナム弾を喰らえば…あばら骨にヒビが入るかと思ったわ。このインナー、結構よくできてるわね…一キロの先のマグナムライフル弾を止めるんですもの」

それを聞いたHYとIY、

「えっ、VTさんのライフルって…」

とIYが言うと、

「そうよ、私のライフルはA国の軍隊でも使われている有名なスナイパーライフルの強化版よ」

と、VTは何を今更…と言う体で答えた。

「…だから、有効射程がわたし達より長いんだ…『隻眼の魔女』をライフルスコープごと撃ち抜いたのも…」

とHYが言うと、

「そうね、七・六二ミリのライフル弾のボルトアクションライフルなら、有効射程距離は八百メートルかな」

VTとHY、IY達の会話を他所に、HGはGYに対して、

「今後、我々に手出ししないか、味方になるのなら、進呈するぞ」

「そうね…私は組織を裏切った身…暫くどこかに潜伏して組織からの暗殺から逃げないと…それには、このインナーが要るわね。いいプレゼントありがとう…感謝するわ…でも、お気に入り穴を開けて、血糊で汚すのは…」

「いいじゃん、『緋扇の軍師』はここで死んだんだ。そのC国ドレスも変え時だよ」

と、HGが言うと、GYは

「そうね…古い着物は脱ぎ棄てないかね」

●GYの行く末

OM大尉達が拘束したC国反政府組織の構成員とは別にP国の海賊団の棟梁が数人含まれている事が判明した。GYが気を利かせて呼び寄せてくれたらしい…そいつらを尋問したOM大尉は、P国T島の警察に引き渡すと、C国反政府組織の構成員達を練習艦YMに乗せて、G海軍基地を出港した。

練習艦YM司令官室…

「彼女が、C国反政府組織の幹部の一人『緋扇の軍師』こと、GYだ」

と、HGが後ろに居るGYを親指で、指し、

「ついでに言うと、彼女は現在幽霊だ」

と付け加えた。それを聞いたNM提督が、

「だったら、我が国に来ない？丁度陸軍の参謀本部で教育してくれる人、探していた所なの…本当は、ダーリン騙して連れて行こうと思ったけど、ダーリンの娘達が可哀想だから、返してあげないとね」

「何だと！」

「あら、いいわね。その条件」

とGYが言うと、HGは

「GYさんよ、気を着けな、この提督俺より狡猾でしたたかだぞ」

「…そうなの？」

「ダーリンったら〜」

と、膨れるNM提督に、HGは、シレっと

「ここはひとつ、彼女を派手に水葬してくれないかなあ…」

と言った。その言葉の意味をGYとNM提督はお互い顔を見合わせて、ニヤリと笑った。

OM大尉達が尋問した海賊の根城になっている海岸に、練習艦YMは沖から、その主砲を向けて威嚇し、OM大尉達が上陸して隠れる様に築かれている村を襲撃して、海賊行為の証拠を回収し、そこに捕らわれていた外国人達を救出し、回収して、ついでに海賊行為に使用している船の機関部を破壊するなどした。それを数か所実施した。回収した証拠並びに捕らわれていた外国人達を乗せて、練習艦YMがG海軍基地に戻ると、岸壁にはRSと数人の人物が手を振っていた。

「おじさ〜ん」

「やあ、Sちゃん来てくれたんだ」

「おとーさんから、ワタシの組織に連絡があつて、反政府組織の要員を引き取る様について…」

で、おじさんの事知ってるワタシがよこされたの」

…RRの娘RSはC国の国家調査局の要員です。作者

「そうか…それは、ご苦労様」

「で、〃緋扇の軍師〃は、何処？」

「…嗚呼、国際救護隊の職員が射殺したんで、沖に出たついでに水葬にしてきた」

「何ですって！」

「まあ、落ち着けSちゃん…これあげるから」

と言って、HGはスマートフォンを取り出した。

「ナニ？」

と言って、スマートフォンを覗き込むと、

「チョ！これワタシが以前、白山亭の店内で隠し撮りされた奴じゃないの！（巻き込まれ

親父の邂逅」参照」

「…あ、ゴメンこれじゃなくて…こっち」

「あ、これって…」

「〃緋扇の軍師〃の射殺直後の写真…これあげるから、帰って上司に報告してね」

「…うーん、しょうがないなあ」

RS達C国国家調査局の職員が、OM大尉達が拘束したC国反政府組織の構成員達を練習艦YMから降ろして、護送用のトラックに乗せて引き上げて行った。

また、回収した海賊行為の証拠並びに捕らわれていた外国人達は、G海軍基地に引き渡した。

● 帰宅

練習艦YMの司令官室で、執務机を挟んで、HGはNM提督とGYとお茶を飲みながら、

「NM提督、これでウチに返してくれるよな」

「はい、ダーリンご苦労様…ねえ、ダーリンも私の国に来ない。歓迎するわよ」

と言うが、HGはキッパリ、

「嫌です」

と答えた。

「アン、いけず」

NM提督が身悶えするのを見てGYは呆れていた。

「じゃ、帰りましょうか…」

と言って、NM提督は、ブリッジに居るLM艦長に、

「出航！目的地、皇国Y海軍基地」

『イエス・マム』

VTは、

「私は、ここで別れるわね。多分近日中に正式に皇国支部に転属になると思うから、落ち着いたら、お店に遊びに行くわね」

と、言って。VTは練習艦YMを降りた。

練習艦YMはY海軍基地に向けて出港した。

その途中、HG達は行きと同じく、YMの後甲板にて、乗艦しているOM大尉配下の海兵隊並びに、訓練生と戦闘要員達を鍛えた。

「ダーリン、もう休んでくれてもいいのに…」

YMの後甲板にある明り取り窓を開けて、その様子を見ていたNM提督が、HGに言うと、

HGはシレっと、

「いや、こいつらと遊んで躰を維持しないと長い船旅で体が鈍る」

「あ、遊んで…(汗)」

Y海軍基地に接岸すると、岸壁にTTとB侯爵ならびにその秘書のTKが出迎えに来ていた。

練習艦YMのタラップを降りて来たHGにTTがいきなり抱き着いて、

「准尉く、准尉く、生きて帰って…」

「ワイワイ…TT。そんな大げさに」

「准尉が帰って来なかったら、私どうしていいか…」

と、HGにいつまでも抱きついて離れないTTを見て、HYは(TTって、親父がいないと意外にポンコツなんだ…)と思った。それを他所に、B侯爵が

「HG社長、この度の遠征ご苦労様でした。そして、多大の成果を残したそうで…B国国王はもとより、皇王陛下並びにOT殿下を始め、C国皇帝陛下からも感謝の言葉を頂いています」

「いえ、侯爵様。私はただ、こちらに居るNM提督に拉致されて手伝わされただけの事です」と、一応謙虚な態度で言うのと、

「ダーリン、そんな…」

と、悲しそうに言う、NM提督の言葉にTKが早速食いついた。

「あのくHG社長を、今『ダーリン』と呼びましたが…(チヨ、この女、HG社長とどういう関係？それから、TT！さっさと離れなさいよ！)」

「あら、貴女は？」

「私、こちらにおりますB侯爵様の第一秘書のTKと申します」

「…あら、そうなの…私は、ダーリン…いえ、HGさんの古い知り合いよ。見た所、あなた

も、こちらの方と同じくダーリンに抱きつきたいみたいね」

と、まだHGに抱きついて離れないTTをNM提督は指さすと、TKは凶星を刺され、

「な、何を（ギクッ）」

B侯爵は、そんな事をお構いなしに、

「HG社長には、皇王家からの感謝状と報奨金、またB国王からNM提督があなたに提示した依頼料の三倍の額を支払う事を聞いています」

「エッ？」

「また、任務に参加した、碇屋エージェント部門の社員の方々には、感謝状と報奨金が。またY海軍基地所属の海兵隊隊長EM大尉並びにその部下、また海上警備庁第三管区所属巡視船Mの海上保安員WY二等海上保安士並びにその部下の方々にも、皇王家並びにB国王室から感謝状と報奨金に加えて、それぞれの所属組織の海外勤務手当を支払うとの事です」

「「「やったー！」」」

HGは岸壁から去り際、登舷礼で見送ってくれる練習艦YMの乗組員達に手を振り、ついでに後部の司令官室の窓から手を振っているGYに対して、微笑んで手を振った。それをTとTKに見咎められた。

「准尉、誰ですか！甲板に上がらず。あの船室の窓から手を振っている女性は何？」

●エピソード、TYのお見合い

「ただいま帰りました…」

「お帰り、TY…って、皇服着て…チョット、シャッターチャンス！」

「HY姉さん…疲れているから…」

「そうね、疲労が顔に出ているわね…でも、シャッターチャンス！」

「あのね…」

「お風呂入る？…でも、その前に…」

と言って、見合いの結果を聞きたくて、ウズウズしているH Yに対して、T Yはため息をつくと、

「ハイハイ、判りました。相手のW Yさんの弟さんと、二人で話して、お互い意気投合しました」

「あら、いいじゃない！」

「わたしが、あと数年エージェントを続けて、更にI Aを私の後進として育てる事にしても納得して貰いました」

「姐さん…」

T Yの言葉に、I Aは声を詰まらせた。

「取り敢えず、後一年はこのままで、その間に二人で度々会って、もっと深め合い、それで互いに理解できれば、結婚を前提とする事にしました」

「ヤッタネ！T Y」

「ま、彼も正規海軍で、殆ど洋上に居るけどね…」

「ナニそれ！」

「なにせ、W 家の人だから…かつて水軍を率いた海の豪族の末裔だから…」

「巻き込まれ親父の海賊 Ⅱ完Ⅱ」